

発掘調査報告第16集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業（昭和58年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

青木遺跡

—— 第1次緊急発掘調査報告書 ——

1984

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第16集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業（昭和58年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

青木遺跡

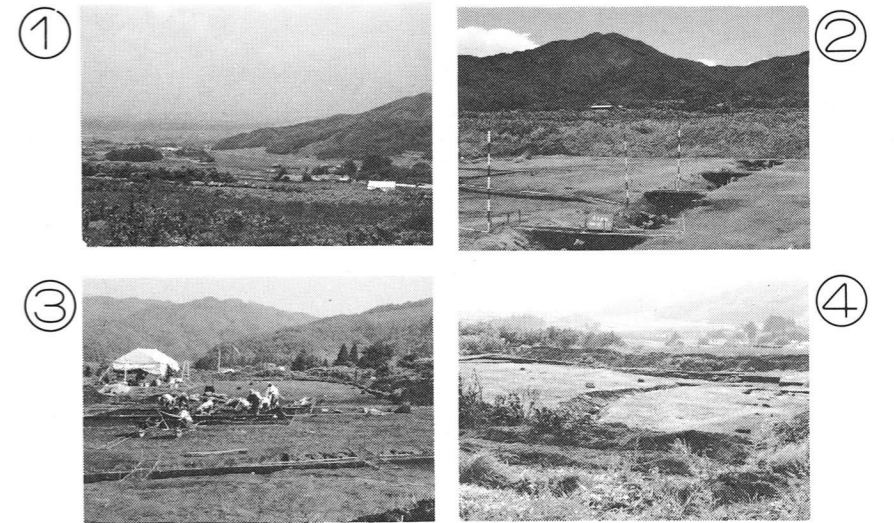
—— 第1次緊急発掘調査報告書 ——

1984

南信土地改良事務所

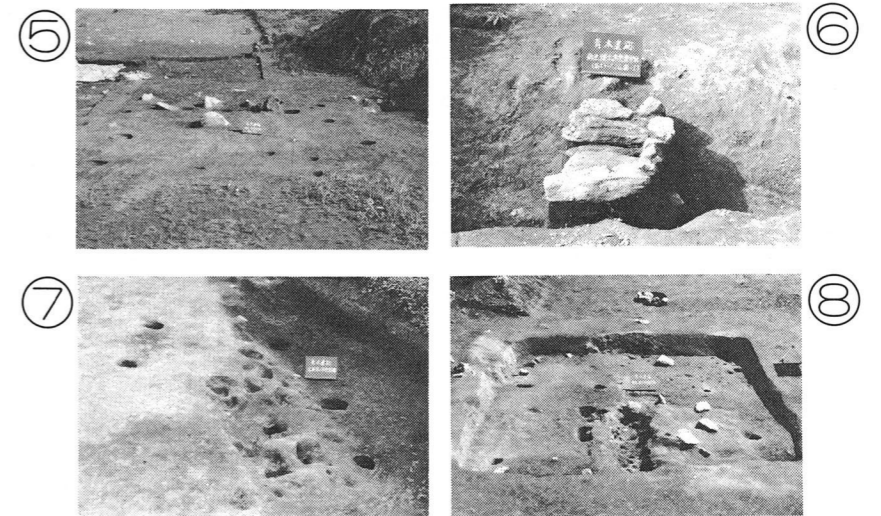
駒ヶ根市教育委員会





- ① 青木遺跡全景（東より）
- ② 青木遺跡第1・2次調査区(西より)
- ③ 第1次調査区全景（南より）
- ④ 第2次調査区全景（東より）





⑤ 青木遺跡第1次調査区柱穴址群

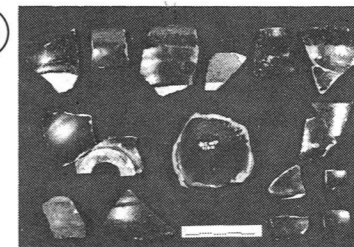
⑥ 第1次調査区敷石火葬墓

⑦ 第1次調査区第1号住居跡

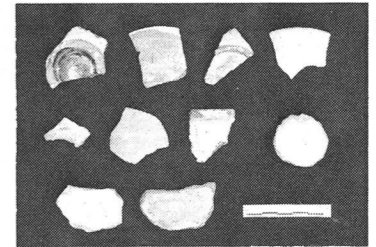
⑧ 第2次調査区第1号住居跡



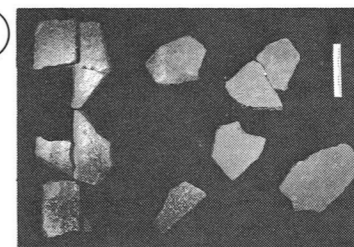
⑨



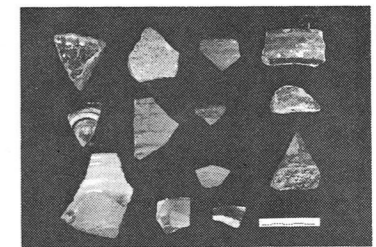
⑩



⑪



⑫

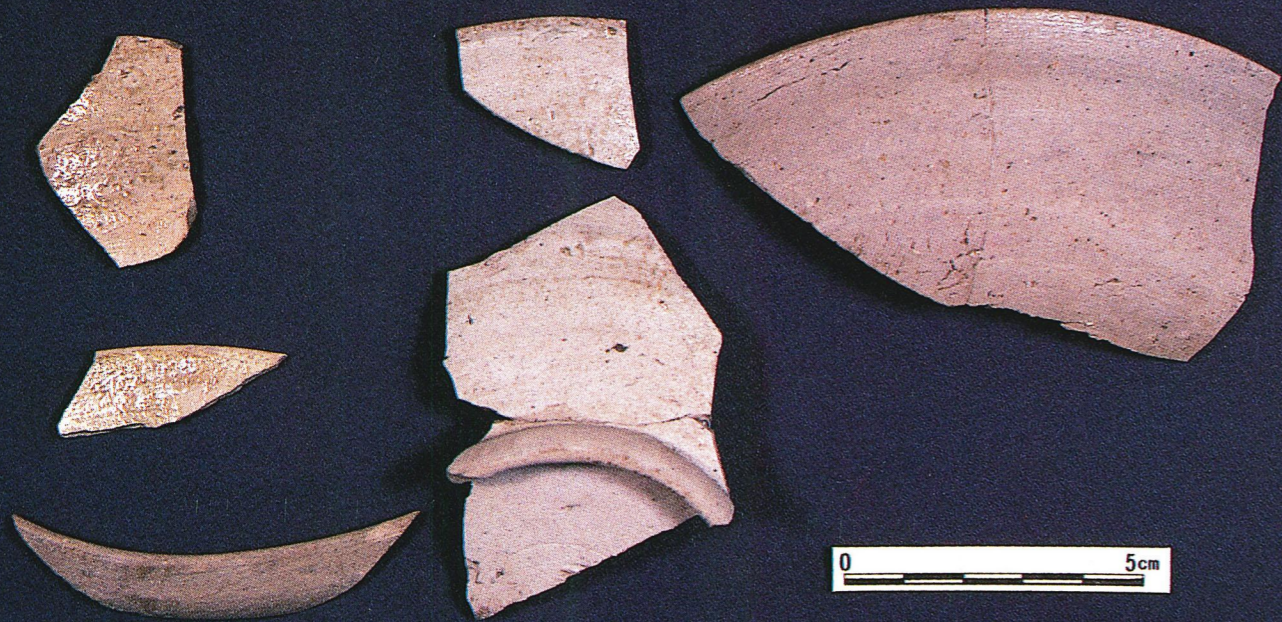


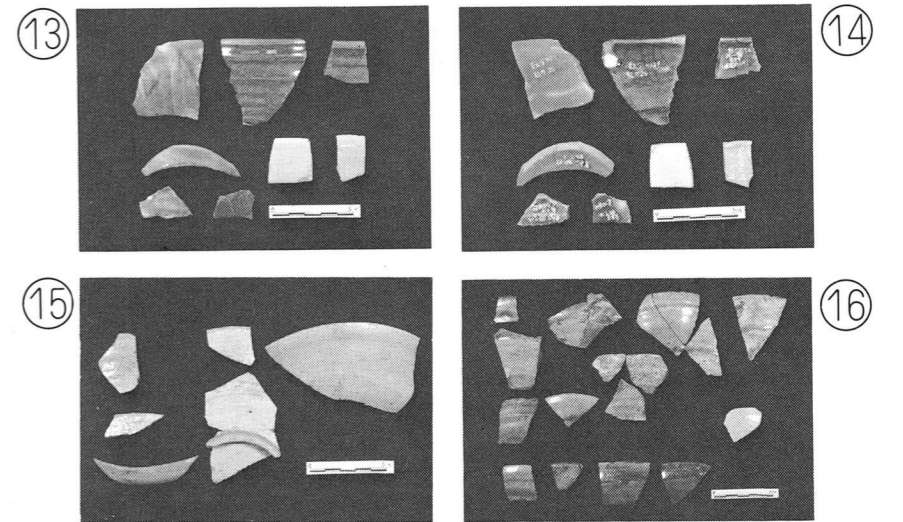
⑨ 青木遺跡出土青磁器

⑩ 同左 青磁器（裏面）

⑪ 青木遺跡出土灰釉陶器

⑫ 同左 施釉陶器





⑬ 青木遺跡出土天目茶碗
 ⑭ 同左 施釉陶器
 ⑮ 青木遺跡出土常滑大甕
 ⑯ 同左 施釉陶器

序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、竜東地区の県営ほ場整備事業及び土地整備（個人）に伴い、昭和58年度に実施された青木遺跡第1次・第2次の緊急発掘調査の報告であります。

発掘調査を行いました青木遺跡は、竜東東伊那地区に属し、伊那山脈の一要素であります高鳥谷山及び火山峠に源を発する塩田川の左岸段丘上に位置しており、扇状地の中央部のやや高い舌状台地上に立地しております。戦国時代末期の天正年間初めに、この青木遺跡の西方250mの舌状台地先端部の青木城（館址）には、牛山道賢が居館を構えたと伝えられ、今回の青木遺跡の調査も、その一端を解明すべく期待されておりました。

幸いにも今年度において、文化庁及び長野県教育委員会の御指導と御高配を得て、駒ヶ根市文化財審議会会長友野良一氏を団長とする青木遺跡発掘調査団を編成し、本格的な発掘調査を実施することができました。当調査の結果、第1次調査では、中世の住居跡、焼土址、配石遺構、礎石、堀、柱穴址群等の多数の遺構と青磁・天目茶碗等の多くの遺物が発見され、また、第2次調査では、平安時代末の住居跡、堀、土塋、集石址等の遺構と、土師・施釉陶器等の数多くの遺物が発見され、次年度に予定される青木城遺跡の発掘調査の基礎資料を検出し成果が得られました。

長期間にわたって、発掘調査をご指導下さった友野団長を初め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所並びに東部土地改良区の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和59年3月20日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

凡 例

1. 今回の調査は、昭和58年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業に先立つもので、昭和58年7月6日から8月24日にかけて調査したものである。
2. 発掘調査は、南信土地改良事務所の委託により、国県補助金を得て、駒ヶ根市教育委員会を中心となり、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。
3. 本報告書は、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述は簡便にした。
4. 遺物整理作業の中で、土器洗い及び註記は宮下節子・福沢泰陽が担当し、土器の復元を小松原義人が担当した。土器の実測は、小原晃一、石器の実測は、久保田茂明、小原が担当し、図面製図及びトレースは、北沢武志、久保田、福沢、中村智幸、宮下、小原が担当した。拓影、写真撮影は、小原が担当した。
5. 本報告書の執筆は、小原が行った。
6. 本遺跡の出土品及び諸記録・図面は、市立駒ヶ根博物館が保管している。
7. 挿図中・写真の遺物No.は通し番号であり、本文中の番号と一致する。
8. 遺構・遺物関係の図面の縮尺は、その都度明示してある。
9. 遺物・石質については、下記のとおりである。

● 縄文土器 (早・中期含む)	☒ 敲打器	● 施釉陶器 (中世・近世)	⊕ 打製石器
☐ 石英塊(火打石)	● 染付陶器	▲ 磨製石器	◎ 磨り石
■ 土師器(内黒)	☆ 青磁器	▲ と石	* 鉄製品
▣ 土師器	▲ 天目	● 古銭	○ 灰釉
▤ 須恵器	☒ 常滑		● 黒耀石剥片
	⊗ 内耳		

10. 遺構等の断面層位は、下記のとおりである。

I層—表土(明褐色土)	V'層— " +ローム	IX層—焼土
II層—耕土(暗褐色土)	VI層—黒色土	
III層—耕土(攪乱・うね)	VI'層— " +ローム	
IV層—黒褐色土(木炭粒・ロームブロック)	VII層—褐色土+砂利	
V層— " (III+ロームふらん土)	VII'層— " +小礫	
VI層—暗茶褐色土(木炭粒・ロームブロック)	VIII層—ローム層(砂質)	
VI'層— " (" +ロームふらん土)	VIII'層—ロームブロック	
VII層—褐色土	VIII''層—ロームふらん土	

目 次

序 文
凡 例
目 次

第 I 章 発掘調査の経緯	9
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	9
第 2 節 調査会の組織	9
第 3 節 発掘作業経過(発掘作業日誌)	10
第 II 章 遺跡の環境	14
第 1 節 位置及び地形	14
第 2 節 歴史的環境	14
第 III 章 発掘調査	21
第 1 節 調査概要	21
第 2 節 調査北区遺構と遺物	21
第 3 節 調査南区遺構と遺物	24
第 IV 章 考 察	32
第 1 節 出土遺物	32
第 2 節 遺 構	42
第 V 章 ま と め	42
挿 図 目 次	
第 1 図 青木遺跡位置図	17
第 2 図 青木遺跡及び周辺遺跡位置図	18
第 3 図 青木遺跡第 1 次・第 2 次調査区域及び遺跡範囲	19
第 4 図 青木遺跡第 1・2 次調査区遺構全測図	20
第 5 図 北区第 1 号住居跡実測図	23
第 6 図 第 1 号住居跡実測図及び遺物分布図	23
第 7 図 第 1 号住居跡及び周辺遺物実測図	21

第8図	北区遺構実測図及び遺物分布図	別添袋入
第9図	焼土集中箇所周辺出土遺物実測図	22
第10図	南区A～Pグリッド内遺構及び第1号集石址実測図並びに遺物分布図	別添袋入
第11図	第1号集石址及び周辺出土遺物実測図	26
第12図	南区A・B・E・F・I・Jグリッド，第2号集石址実測図及び出土遺物分布図	27
第13図	第2号集石址及び周辺出土遺物実測図	28
第14図	柱穴址群実測図及び遺物分布図	28
第15図	柱穴址群周辺出土遺物実測図	31
第16図	南の堀実測図及び遺物分布図	29・30
第17図	南の堀及び周辺出土遺物実測図	29・31
第18図	敷石火葬墓実測図	31
第19図	敷石火葬墓及び周辺出土遺物実測図	31
第20図	敷石火葬墓実測図及び遺物分布図	31
第21図	浙江省龍泉県の古窯址分布図	32
第22図	長野県内青・白磁器等出土遺跡分布図	38
第23図	白瓷・白瓷系陶器窯分布図・美濃古窯跡群分布図・常滑編年図	41

写真目次

写真1	青木遺跡全景，第1次調査区全景	
写真2	第1次調査区南区グリッド・トレンチ設定状態	
写真3	第1次調査区近景及び調査風景	
写真4	第1次調査区北区第1号住居跡及び遺物出土状態並びに出土遺物	
写真5	第1次調査区北区礎石出土状態及び出土遺物	
写真6	第1次調査区南区第1・2号集石址及び出土石器	
写真7	第1次調査区南区南の堀I～Vベルト設定状態，I～Vベルト断面	
写真8	第1次調査区南区敷石火葬墓木炭・焼土集中状態，清掃状態，骨片出土状態	
青木遺跡日報No.1・2		15・16
出土遺物一覧表		33

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市東伊那火山に位置する青木遺跡が駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業の一部に入るとのことで、昭和57年9月7日に、長野県教育委員会白田主事、南信土地改良事務所柳沢、丸山主任、東部土地改良区片桐理事長、駒ヶ根市農林課倉田、市教育委員会北沢、増沢、小原、調査団長友野氏出席のもとに、事前現地協議を行った結果、記録保存を行うということになった。調査面積500㎡、調査費用300万で、駒ヶ根市が事業主体として発掘調査を行うという協議内容であった。

調査費用の内訳は、南信土地改良事務所分217.5万円、国庫補助分82.5万円（国庫補助分41.2万円、県費補助分12.3万円、市負担29万円）である。

事務手続きは、昭和58年5月2日付国庫補助金交付申請、同年4月27日付発掘調査届、同年9月19日付県費補助金交付申請を行う中で、同年4月21日に、南信土地改良事務所長と駒ヶ根市長との間に、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取りかわし、つづいて、7月2日に、市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で、再委託契約を締結した。

調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととし、青木遺跡発掘調査団を編成し、団長には、友野良一氏をお願いして、昭和58年7月7日から調査に入った。

第 2 節 調査会の組織(駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会)

顧問 鈴木 義 昭 (駒ヶ根市教育委員長)
会長 木 下 衛 (市教育長)
理事 小池 金 義 (市教育次長)〈会長職務代理〉
" 友野 良 一 (駒ヶ根市文化財審議会会長)
" 松村 義 也 (" 副会長)
" 宮脇 昌 三 (" 委員)
" 林 赳 (")
" 竹村 進 (")
" 下村 幸 雄 (市立駒ヶ根博物館長)
監事 中原 正 純 (市文化財保存会会長)

- " 北原 名田造 (駒ヶ根郷土研究会会長)
 幹事 北沢 吉三 (市教育委員会社会教育係長)
 " 小林 晃一 (" 主査)
 " 北原 和男 (市立駒ヶ根博物館)
 " 野々村 はるゑ (")
 " 斉藤 香代 (")
 " 小原 晃一 (")
 ・青木遺跡発掘調査団(事務所 駒ヶ根市上穂南2番15号 市立駒ヶ根博物館内)
 団長 友野 良一 (日本考古学協会会員)〈発掘担当者〉
 調査員 小原 晃一 (長野県考古学会会員)〈 " 〉
 " 小町谷 元 (上伊那考古学会会員)
 " 小松原 義人 (長野県考古学会会員)
 " 田中 清文 (")
 指導者 関 孝一 (長野県教育委員会指導主事, 至58.3.31)
 " 白田 武正 (" ")
 " 小林 孚 (" 自58.4.1)
 " 伝田 和良 (" ")
 " 郷道 哲章 (")
 " 樋口 昇一 (長野県史刊行会専門主事)
 " 宮下 健司 (")
 " 林 茂樹 (日本考古学協会会員) (順不同, 敬称略)

第3節 発掘作業経過

・発掘作業日誌

- 7月1日(金) 小原・小町谷両名で、発掘器材を整理し、不足器材、消耗品を手配する。
 7月6日(水) 博物館より、上伊那貨物㈱トラックで、発掘器材を運搬する。現場の主グイ10m×10m間隔で、南・北両区に設定する。南区南西隅を、あー1とし、北方向へ6・11～31、東方向へ、か・さGPとする。10m×10mの間に、2m間隔に竹ぐしを打ち、小グリッド設定。
 7月7日(木) 午前8時00分、作業員11名、調査員2名(小原・小町谷)が現場集合し、作業時間を、午前8時から午後5時までとし、昼食休1時間、午前・午後休憩15分ずつとすることを話し合う。午前中、テント設営、器材整理、南区小グリッド掘り下げを始める。午後、1時30分より、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会役員(鈴木顧問外、8名)、作業員、調査員全員で長春

寺吉沢住職をお願いし、発掘作業の安全と成果を祈って、鍬入れ式・仕事初めを行う。

南区あ-1・3・5・7G, う・お-18を掘り下げ, あ-1Gからは内耳片2点, あ-7Gからは陶器底部片が出土する。東へ向って表土・耕土は浅くなって行く。

7月8日(金) 雨天の為、現場作業休み。

7月9日(土) 南区周辺を $S = \frac{1}{200}$ で地形測量をし、グリッドを図示する。BM設定, あ-11GPの南にL=718.400とする。あ-9・11・13, う~け-3・5・7・9Gを掘り下げる。う-7・お-5Gより打製石斧出土。南から北へかけて徐々に表土が深くなる。ベルト設定。

7月10日(日) 北区周辺を $S = \frac{1}{200}$ で地形測量を行う。北区ベルト設定。南区あ・う・お・き・け-11・13G, う・き・さ-SNトレンチを掘り下げる。内耳・天目・染付・陶器・打石斧等が出土する。

7月11日(月) 南区から北区へ延びるSNトレンチ(う・き・さ), 西から東へ延びるWEトレンチ(5・9)を設定し, 掘り下げる。トレンチ掘り下げ完了。さ-SNトレンチセクション清掃・写真撮影。セクション実測。9-WEトレンチけ・こ周辺, 表土30~35cmに焼土検出。5-あ・こ・さG, 6-うG, 9-う・お・きG掘り下げ。土師器, 陶器, 染付等出土。さ-16~34SNトレンチ, き-16~34SNトレンチ掘り下げ。常滑, 内耳, 青磁出土。出土遺物写真撮影。北区へトレンチの間に5×5mのA~Hグリッド設定。

7月12日(火) 南区き-SNトレンチ, う-SNトレンチセクション実測。5・9-WEセクション実測。北区う-22~33トレンチ, う~き-20トレンチ, い~き-25トレンチ, い~き-30トレンチ掘り下げ。う・き-SNトレンチ写真撮影。北区より青磁, 常滑, 瀬戸出土。

7月13日(水) 南区5・9-WEトレンチ(以後, Tと略す)0~13mまで実測。ブルドーザーで耕土はね(三沢ブル)。北区西側の地形測量。B・D・F・Hグリッド掘り下げ完了。C・E・Gグリッド掘り下げ中途。Cグリッドより青磁碗口縁部出土。Bグリッドより打製石斧, 瀬戸, 常滑, 青磁出土。Eグリッドより常滑, 内耳出土。

7月14日(木) 北区き-SNセクション実測。写真撮影。20・25・30-WE, Tセクション写真撮影。C・F・Gグリッド掘り下げ完了。南区全体5分の3仮清掃。南隅に東西に堀の様な落ち込みあり。仮清掃下より, 寛永通宝, 陶器, 染付, 打製石斧が出土。写真撮影。

7月15日(金)~18日(月) 雨天及び会議の為、現場作業休み。

7月19日(火) 北区20・25・30-WE, T仮清掃, 写真撮影, セクション実測。30-あGより内耳部出土。南区全面仮清掃。主グイ(10×10m)打ち直し。堀に南北5本, 東西1本のベルト設定。北区A~Hグリッド掘り下げ完了。

7月20日(水) 北区さ-SN, T16~34GPにかけて, セクション実測。南区堀ベルトを残し掘り下げ。IVから陶器底部片出土。写真撮影。

7月21日(木) 雨天の為、現場作業休み。

- 7月22日(金) 北区26-う～さ, 31-う～さベルトはずし。き-26～31, さ-21～31ベルトはずし。午後雨天の為, 現場作業中止。
- 7月23日(土)・24日(日) 雨天の為, 現場作業休み。
- 7月25日(月) 北区き-21～25ベルト, 21-え～かベルトはずし。17-き～さ, 23～27-あ～うの範囲の耕土はね。天目, 内耳出土。
- 7月26日(火) 北区No.1～26の出土遺物, 平板測量, レベル実測, 写真撮影。16～20-か～さ, 23～25-あ・いの範囲の耕土はね。打製石斧, 天目, 常滑, 鉄製品出土。21～26-う～きG出土遺物, 焼土集中区, 礫実測, レベル実測, 写真撮影。
- 7月27日(水) 北区16～20-え～かG耕土はね。23～31-あ～うII層まで掘り下げ。16～21-き～さG出土遺物, 礫実測, レベル実測, 写真撮影。
- 7月28日(木) 北区16～19-う～かG耕土はね。16～31-う～か・い～さG仮清掃。29～36-あ・いG耕土はね。18～31-く～さG出土遺物平板測量, 礫, 焼土集中区実測, レベル実測。写真撮影。南区堀IV・V掘り下げ。
- 7月29日(金) 北区15～18-お～くG, 20～25-く～さG, 20～22-く～さG内の礫, 出土遺物, 木炭集中区平板測量, レベル実測, 写真撮影。南区6～16-あ～さG内III層以下に5×5mのグリッド設定(A～Pグリッド)。南の堀I～V掘り下げ中途。焼土・木炭集中区検出。
- 7月30日(土)～8月1日(月) 行事及び雨天の為, 現場作業休み。
- 8月2日(火) 南区F・Gグリッド掘り下げ。Fは完了。J・Kグリッドは掘り下げ中途。F・G・Kグリッドより常滑, 須恵器, 瀬戸出土。
- 8月3日(水) 北区遺構及び地形測量 $S = \frac{1}{200}$ で行う。南区B・C・J・Kグリッド掘り下げ。J・Kは完了。B・Cは $\frac{2}{3}$ 完了。H掘り始める。B・C・F・G・J・Kグリッド出土遺物平板測量, レベル実測, 写真撮影。Cグリッドより陶器片出土。
- 8月4日(木) 南区南の堀I～Vのセクション清掃, 線引き。F・G・J・Kグリッド出土遺物平板測量, レベル実測, 写真撮影。B～D, H, Lグリッド掘り下げ。B・C完了。
- 8月5日(金) 南区C, Dグリッド掘り下げ完了。A・E・Lグリッドは中途。南の堀I～V清掃, 写真撮影, セクション実測。Eグリッドより瀬戸出土。D～Lグリッドにかけ砂層検出。
- 8月6日(土) 南区B～D, H・Lグリッド内出土遺物平板測量, レベル実測, 写真撮影。H・Lグリッド掘り下げ完了。天目, 灰釉出土。A・E・Iグリッド掘り下げ。Eグリッド内は大石と礫集中箇所検出。南の堀I～V内掘り下げ。
- 8月7日(日) 南区堀I～V内掘り下げ。仮清掃後, 写真撮影。A～Oグリッド内写真撮影。K・L・O・Pグリッド内出土遺物平板測量, 礫実測, レベル実測, 写真撮影。
- 8月8日(月) 南区6～16-う・かSNベルトセクション実測。Pグリッド掘り下げ完了。北区25～31-あ～うG内掘り下げ。

- 8月9日(火) 北区26～31-あ～うG掘り下げ。30・31-あG周辺に住居跡と思われる落ち込み検出。30・31-あ・いGより天目、内耳、火打石、縄文中期土器片出土。南区O・Lグリッド内出土遺物・礫平板測量、レベル実測、写真撮影。11・13-WEベルトセクション実測。
- 8月10日(水) 北区31-あ～うG掘り下げ。第1号住居跡とする。覆土下層より内耳、天目、焼土出土。南区堀全面測量($S = \frac{1}{200}$)。Pグリッド内出土遺物平板測量、レベル実測。6～16-う・かSNベルト、11-ベルトはずし。写真撮影。柱穴址群掘り下げ。平板測量。
- 8月11日(木) 南区9-WEベルト写真撮影、セクション実測。A・E・Iグリッド出土遺物平板測量。北区26～31-あ～うG掘り下げ。
- 8月12日(金) 北区26～32-あ～うG出土遺物・礫平板測量、レベル実測、写真撮影。南区9-WEベルトはずし。D・H・L・Pグリッド内礫除去。
- 8月13日(土) 北区26～32-あ～うGベルト写真撮影。26～32-あ～うG掘り下げ。南区南の堀V内平板測量、レベル実測。
- 8月14日(日)～16日(火) 盆休み。
- 8月17日(水) 雨天の為、現場作業休み。
- 8月18日(木) 南区南の堀II～V内出土礫、堀、出土遺物平板測量、レベル実測。V内清掃、II～V礫はずし。焼土集中区(堀I)清掃、写真撮影、セクション実測。
- 8月19日(金) 南区南の堀II～V内出土礫、残土取り上げ。堀内I～Vベルトセクション清掃。
- 8月20日(土) 北区26～32-あ～うG仮清掃後、写真撮影。さらに掘り下げ。第1号住現況平板測量。ピットが南側にあり、床は部分的に(西の土手にかけて)貼り床である。
- 8月21日(日)・22日(月) 雨天の為、現場作業休み。
- 8月23日(火) 南区南の堀I～Vベルト清掃。写真撮影。IV・Vベルトセクション実測。IVベルトはずし。清掃後写真撮影。
- 8月24日(水) 南区南の堀I～IIIベルトセクション実測、ベルトはずし。写真撮影。本日をもって、第一次調査終了。

〈発掘参加者名簿〉

中村文夫、渋谷鉄雄、宮下三郎、小林正信、白川仁重、佐藤慶子、赤羽昭子、佐藤秋子、小林満寿子、渋谷吉子、赤羽笑子、下平チカエ、下平昭恵、川上敏明、北沢武志、中村智幸、久保田茂明、北村英憲、小池裕司、下平和弘

6週間余にわたって、連日の真夏の炎天下のもとで、発掘調査に作業員として参加していただいた皆様方の御理解と御協力により、無事に所期の目的を達するべく調査できましたことに対し、心から感謝の意を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。(小原晃一)

第II章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形(第1・2図, 写真1・2参照)

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山3434, 3435, 3530, 3531—1・2番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ4.5kmに位置し、標高は718m前後である。

駒ヶ根市は、三つの地区から成り、天竜川をはさんで西側に赤穂地区、東側部分に中沢地区、北部分に東伊那地区があり、その内の東伊那地区の北中央部に当遺跡は位置している。

伊那谷は、諏訪湖より流れ出る天竜川とその支流である各々の田切川により開析され、西に木曾山脈(中央アルプス)があり、東に赤石山脈(南アルプス)、中央構造線をはさんで戸倉山、高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走っている。この伊那山脈の一角をなす高鳥谷山及び火山峠に源を發する塩田川が造り出した扇状地の中央部のやや高い舌状台地上に立地し、塩田川との比高差は、最短距離地点で50mを測る。地質基盤は、礫層からなり、その上に新期ローム層(青木遺跡では砂質ローム)が堆積している。

当遺跡の層位は、凡例に示したとおりであるが、第1次調査の内、南区は割合ノーマルであるが、北区は開墾時の土層の移動等により、自然礫層の表出が顕著に見られ、Ⅲ層以下の層位が安定していない。

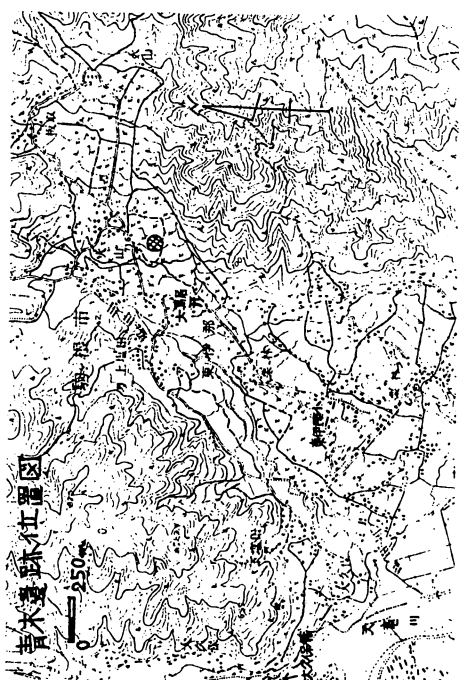
第2節 歴史的環境(第2図参照)

天竜川より東の地区(東伊那・中沢地区)は、遺跡の宝庫として知られ、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」(故鳥居龍藏博士著)に数多くの遺跡が確認されている。特に、天竜川左岸段丘上には、数多くの中世城址(歴史的文献及び調査は少ない)、扇状部には弥生時代後期の遺跡、山麓部には縄文時代の集落跡が存在している。第2図中2は青木城(中世)、3は高山社(青木城居館主、牛山道賢氏に関する棟札が保存されている)、4は塩田城(中世)、5は青木北(縄文・平安)、6は上塩田(縄文、平安、中世)、7は栗林神社東(弥生後期)、8は善込(弥生後期)、9は垣外上(弥生)、10は反目(縄文)、11は箱畳(平安、中世～近世)、12は大久保城(中世)、13は高田城(中世)、14は城村城(中世)、15は小城(中世)、16は稲村城(中世)、17は殿村(平安)、18は原城(中世)、19は古城(中世)、20は高見城(中世)。

青木遺跡1
1983.7.7(木)
駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査
結果集 発行

発掘調査はじまる

東伊那川沿いの青木遺跡で、昭和58年度県営ほ場整備事業に先立って、緊急発掘調査がいよいよはじまりました。場所は、高島谷山を御神体とするための大鳥居がある地点から、伊那生田飯田線(主要才道)を北東に分かれ、約200m位坂登った地点です。遺跡の間辺は、桑畑におおわれ、高島谷山南麓に端をもち、天竜川に向ってのびる埴田川と天王川が造り出した扇状地のほぼ中央に立地しています。標高は700m前後を測り、ています。

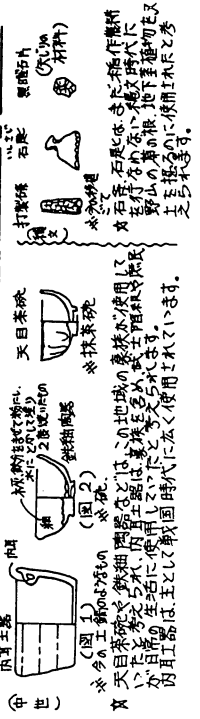


青木遺跡位置図

7月7日(木) 午前中は、ラントの脱着・諸準備と前日に林打ち(10m×10m)をしておいた大グリットの中に、2m×2mのグリット(調査坑一基)を目に設け土層や遺物の包層、遺物の有無を調べるために掘る四角の穴)を設け、スコップやツェレンを使用して掘りはじめました。その結果、内耳土器(図1)や鉄細陶器(図2)の破片が出土しました。

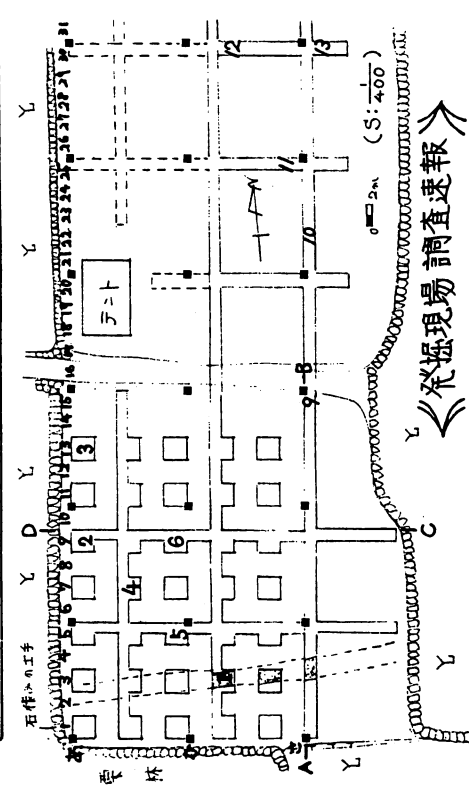
午後は、発掘調査の安全と成功を祈願して、調査会役員(会長木下教育長、鈴木顧問、竹村理事、北原監事、小池理事、教育委員会北沢幹事)、博物館職員、友野団長、調査員、作業員一同で長春寺吉沢住職をお願ひして、鎮火式を行いました。

青木遺跡一 この遺跡では、以前からの表面採集により縄文時代の土器や石器(今から4500年前)、中世の内、室町時代(今から600年前)以降の陶器や陶磁器が出土しています。また、面方谷に青木城(牛山道賢の館址と伝えられる)があり、周辺の地名に、城、城桶が残っています。青木遺跡の字名は、的と呼べることから、的場(矢射り場)であらうと考えられます。今回の発掘調査では、この城に関係した遺物や生活の跡、さらには、古き縄文時代の生活の跡が発見できると考えています。



青木遺跡 2

駒ヶ根市遺跡文化財調査団
編纂、発行
1983.7.11(月)



花畑現場調査速報
[上図中の出土遺物及び遺構の説明]

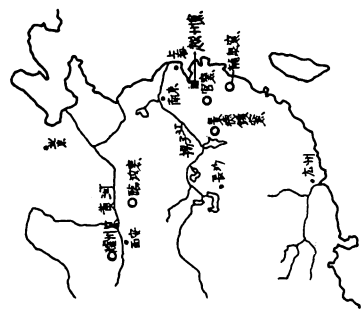
- 1: 溝状の遺構
〜幅2m、致粒の推定長さ28cm
黒色土を堆積している。
深さは約40cm前後。
- 2: 3人程度の花畑器の瓦片が
散見。
- 3: 打製石斧 (伊豆野)
- 4-5: 土師瓦
- 6: 茶臼の蓋 (水注の蓋水)
〜毛口付と中間隔器? (伊豆野)
- 7: 焼土粘土
〜長さ40cm、幅の所から、黒色土中心の
中世の平地住居の可能性が大きい。
- 8: 磨製石斧 (刃部のみ) 木柄部は採掘
- 9: 茶臼茶碗の破片
- 10: 瓦葺土蔵
〜築物の石を南北に大小4個を列を並べて
1層、長さ多く粘土 (長さ15cmと域内)
- 11: 土師瓦
- 12: 青磁器破片 (壺口)
- 13: 土師瓦

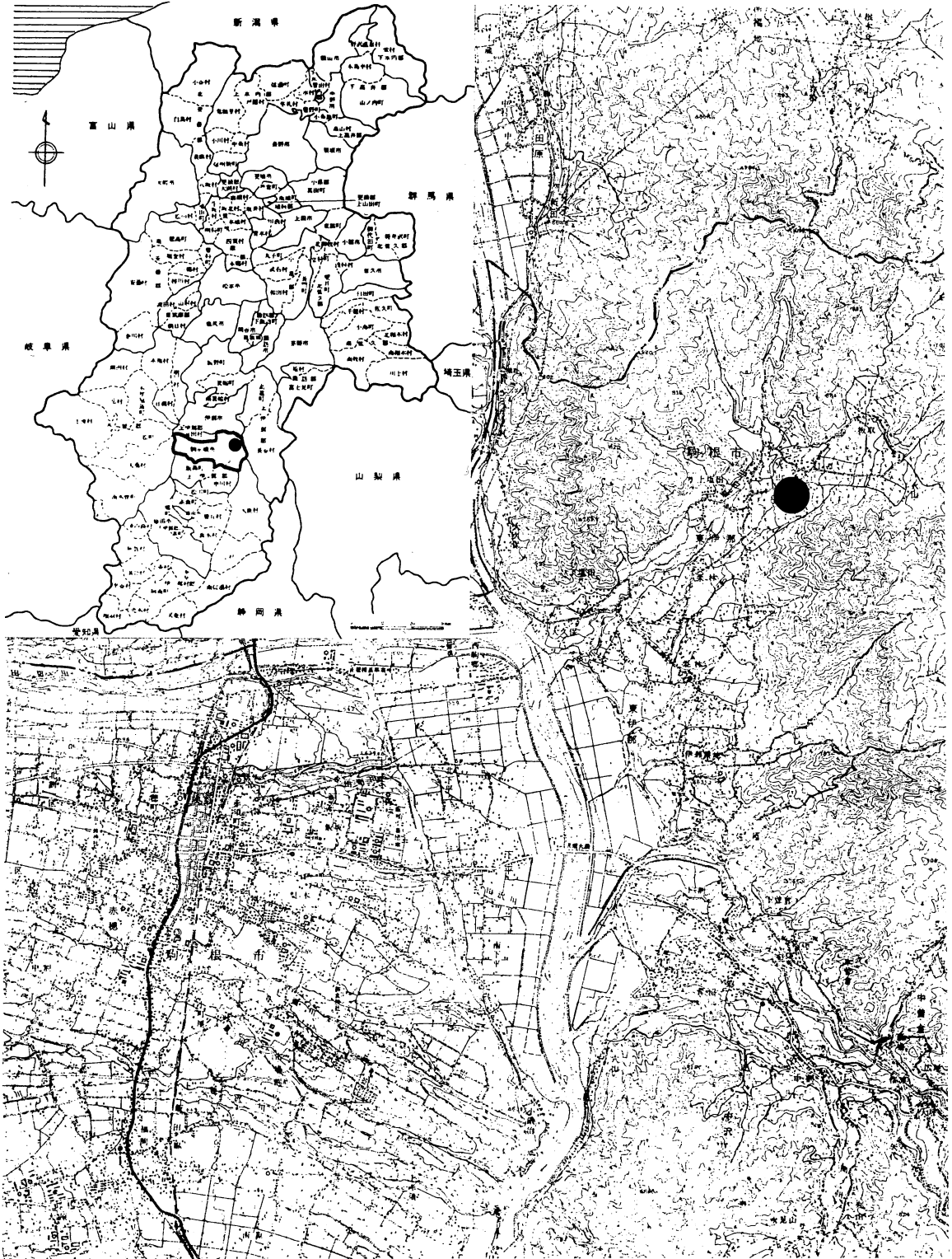
☆ 1-3, 6, 7, 9-13は中世(室町以降)、4, 5, 8は縄文時代の遺物と遺構である。

〈青磁(青瓷)〉

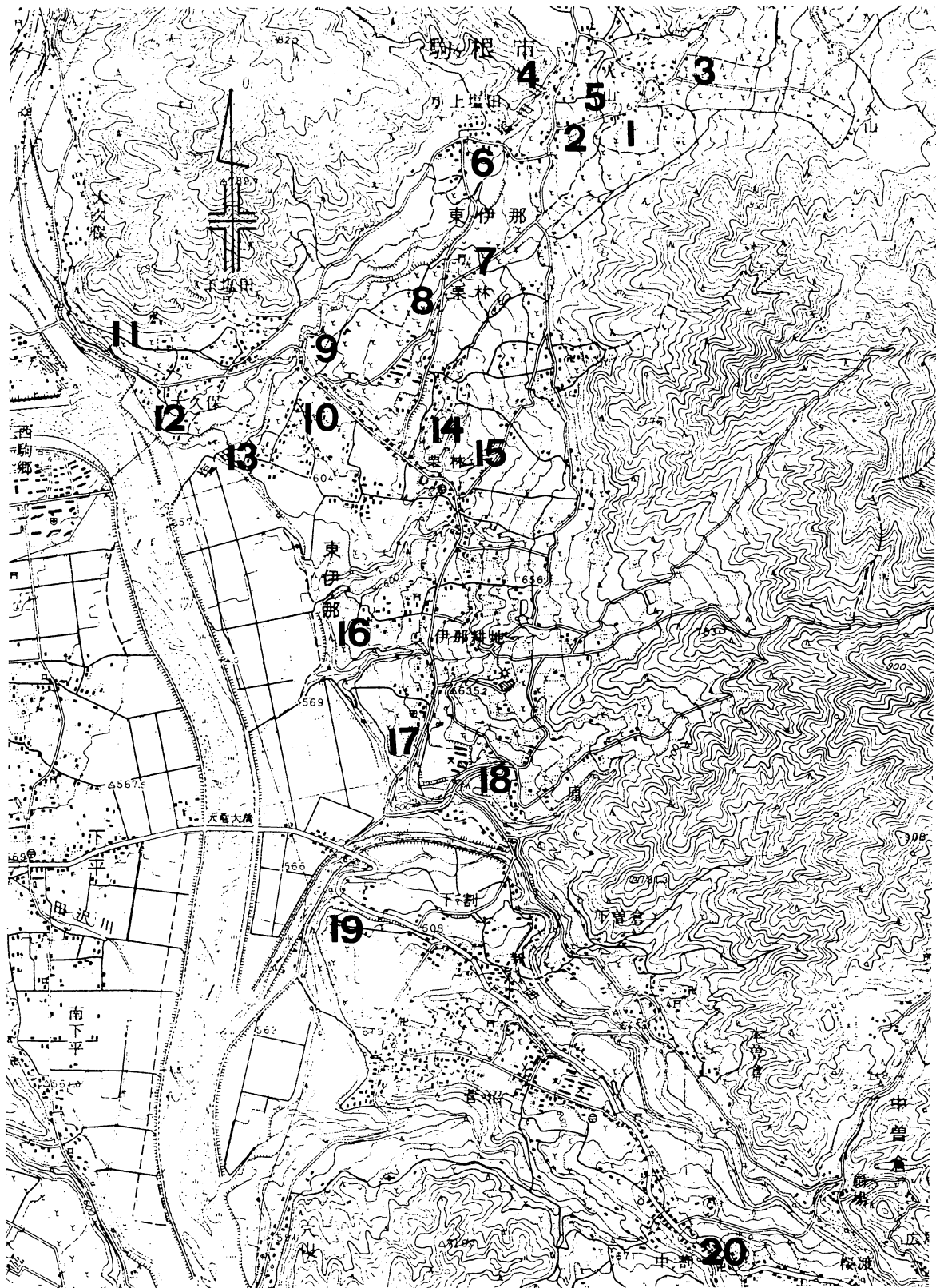
青い釉のものが、た高火度焼成の焼きものをさす。この釉は雑木の灰を成分とし、そこに含まれるわずかの鉄分が還元して青色を呈するのである。中国ではすでに殷(紀元前1200年頃)の時代に、この灰釉をかけた焼きものがつくられていたが、焼成が還元してはいないため釉色は鈍い草色にしかならなかった。その後、周から漢にかけてこの灰釉陶は各地でつくられ、漢の末頃には浙江省紹興を中心とした越州地(越州窯)が大生産地帯として台頭する。越州でつくられた灰釉陶は細潤も整い、色も次第に草色から淡緑へと変換されて青磁に近づいていった。唐代から五代にかけては、技術・意匠の一層の洗練をみと(秋色青磁と高評)、のうち翠色の美しい青磁として完成した。宋代に至り、官窯・汝窯・耀州窯・磁州窯などで完璧の青磁が製作され、やがて高麗・安南・タイに技術が伝はって行った。「『原色陶器大辞典』より抜粋」

西暦	日	本	中	国
1120	純文	殷	殷	
300		唐	唐	
B.C. 0		魏	魏	
200	引玉	晋	晋	
		後	後	
		梁	梁	
		陳	陳	
		隋	隋	
		唐	唐	
710	唐鳥子耳	明	明	
714	唐	北	北	
	正安	朝	朝	
1192	鎌倉	元	元	
1324	室町	明	明	

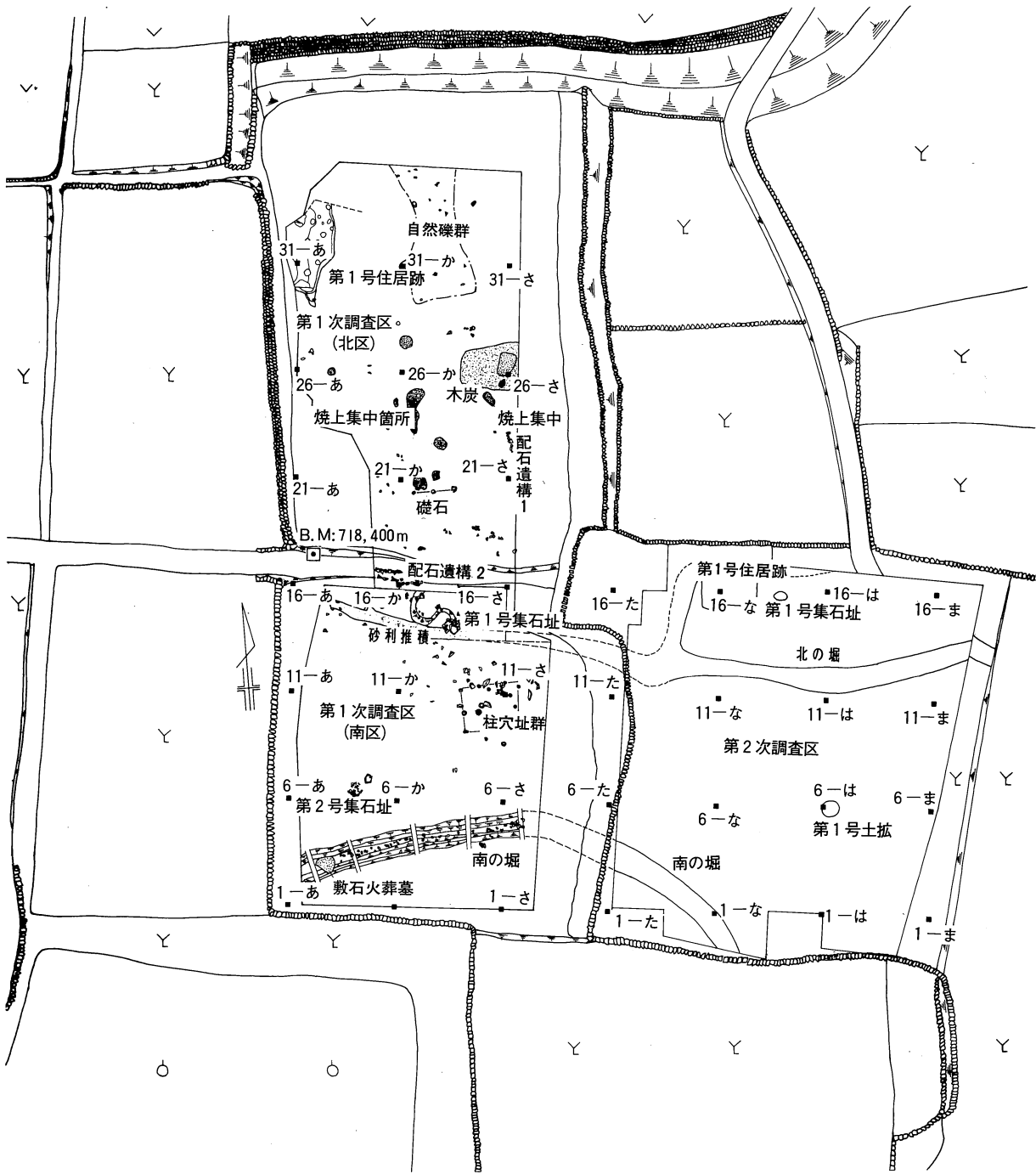




第1図 青木遺跡位置図 (S = $\frac{1}{50,000}$)



第2図 青木遺跡及び周辺遺跡位置図



第4図 青木遺跡第1・2次調査区遺構全測図 (S = $\frac{1}{600}$)

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要(第4図, 写真1~3)

調査に先立ち、第1次調査周辺の桑畑、畑地の表面採集を行い、青磁器片、灰釉、黒耀石剥片、天目、染付、打製石斧、縄文土器片、土師器片と様々な時代の遺物を採集する。

調査方法は、発掘調査に先立ち、調査区の南西隅栗林地角を、基点(あ-1G・P)として、台地の傾斜方向に対して、ほぼ東西-南北軸に沿うように10m×10mのポイントを設定して、調査区中央東西に入り込む農道より南を南区、北を北区とした。基点(あ-1G・P)から、東方向へか・さ、北方向へ6・11・16・21・26・31・36と設定した。掘り下げ方法は、2m×2mのグリッドを南区へ設け試掘し、ブルドーザーで耕土を排土した後で、5m×5mのグリッドA~Pに分けた。北区は、5m×5mのグリッドA~Hに分けた。層位を確認する為のトレンチをグリッドに接して、南区では9・11・13-WEベルトセクション、北区では20・25・30-WEベルトセクション、南区から北区へ通すSNベルトセクションをか・さ-SNとした。

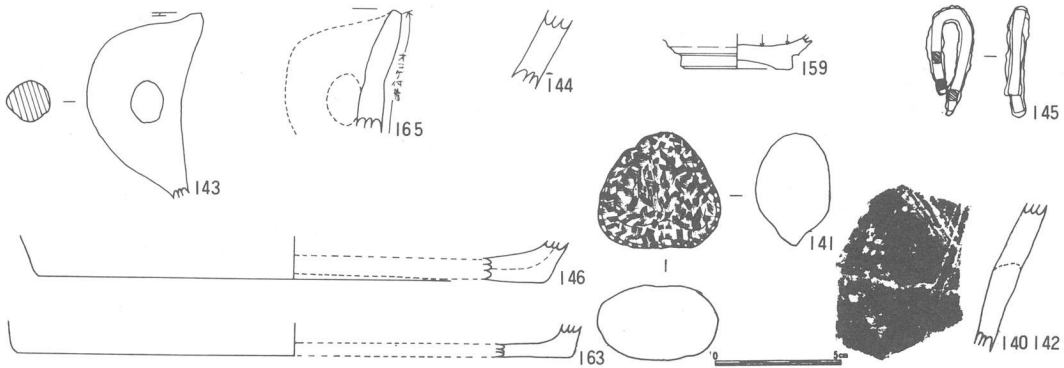
出土遺物は、試掘段階でのグリッド、トレンチ内は一括して取り上げ、南区ではⅢ層以下を全点図面上にドットし、レベルを実測し、北区では、Ⅱ層以下を全てドットし、レベルを実測した。

なお、ブルドーザーで排土したのは、南区Ⅰ・Ⅱ層上層を排土したのみである。

結果として、南区・北区を合わせて、ほぼ1,200m²を発掘調査した。

第2節 調査北区遺構と遺物(第5~10図, 写真4・5参照)

第1号住居跡(第5~7図, 写真4)



第7図 第1号住居跡及び周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

本跡は北区北西隅土手際より検出され、西側半分は土手の為未調査である。現状のプランから、不整長方形と推定され、東西3m30cm、南北6mが検出される。深さは東壁でなだらかで5cm弱、南壁で35cmで、自然傾斜地に造られている。床面は南・北の面は貼り床でタタキがされている。床面北西方向に焼土・木炭が集中し3~5cm推積している。支柱穴はP₁~P₄が存在しP₄は直線上からは、はずれ、深さは、32~50cmを測り、P₁~P₄の底部は堅い。

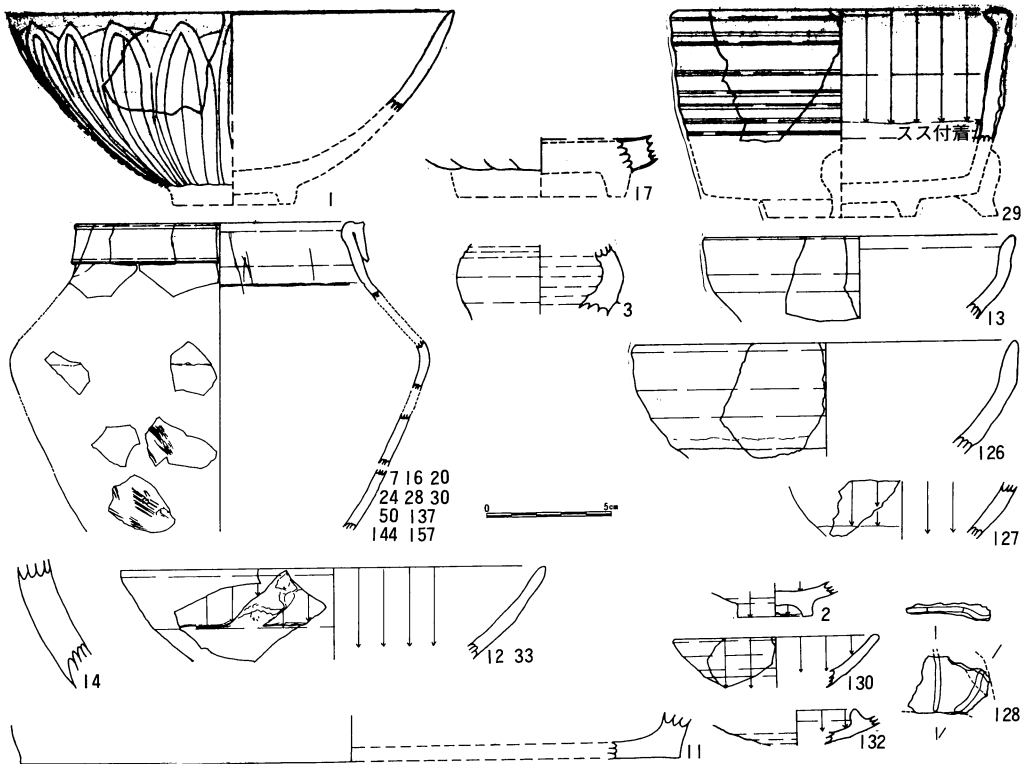
出土遺物は、第7図及び遺物一覧表を参照されたいが、No.140・142の縄文中期初頭の土器を除き、内耳土器片、天目破片、火打石が出土している点から、15世紀代の住居跡と考えられる。

礎石(第8図・写真5)

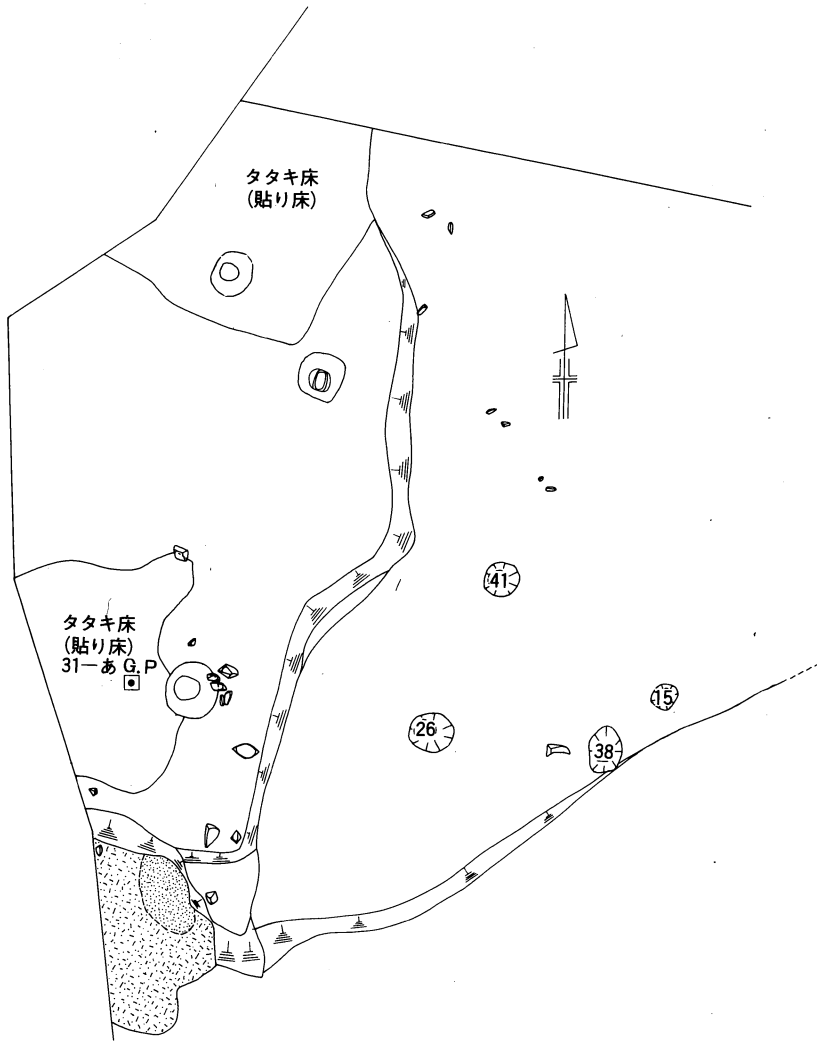
本跡は、21一か・さG・P軸に平行して、東西軸方位に沿って砂質ローム層直上に3点遺存していた。石質は、3点ともに花崗閃緑岩の盤状石で、大きさは長さ30~45、幅測25~35cmを測る。礎石の間隔は1m80cmでほぼ六尺である。北方すぐに焼土集中箇所が遺存している。周辺からは、常滑、火打石、染付陶器等が出土している。

配石遺構1(第8図)

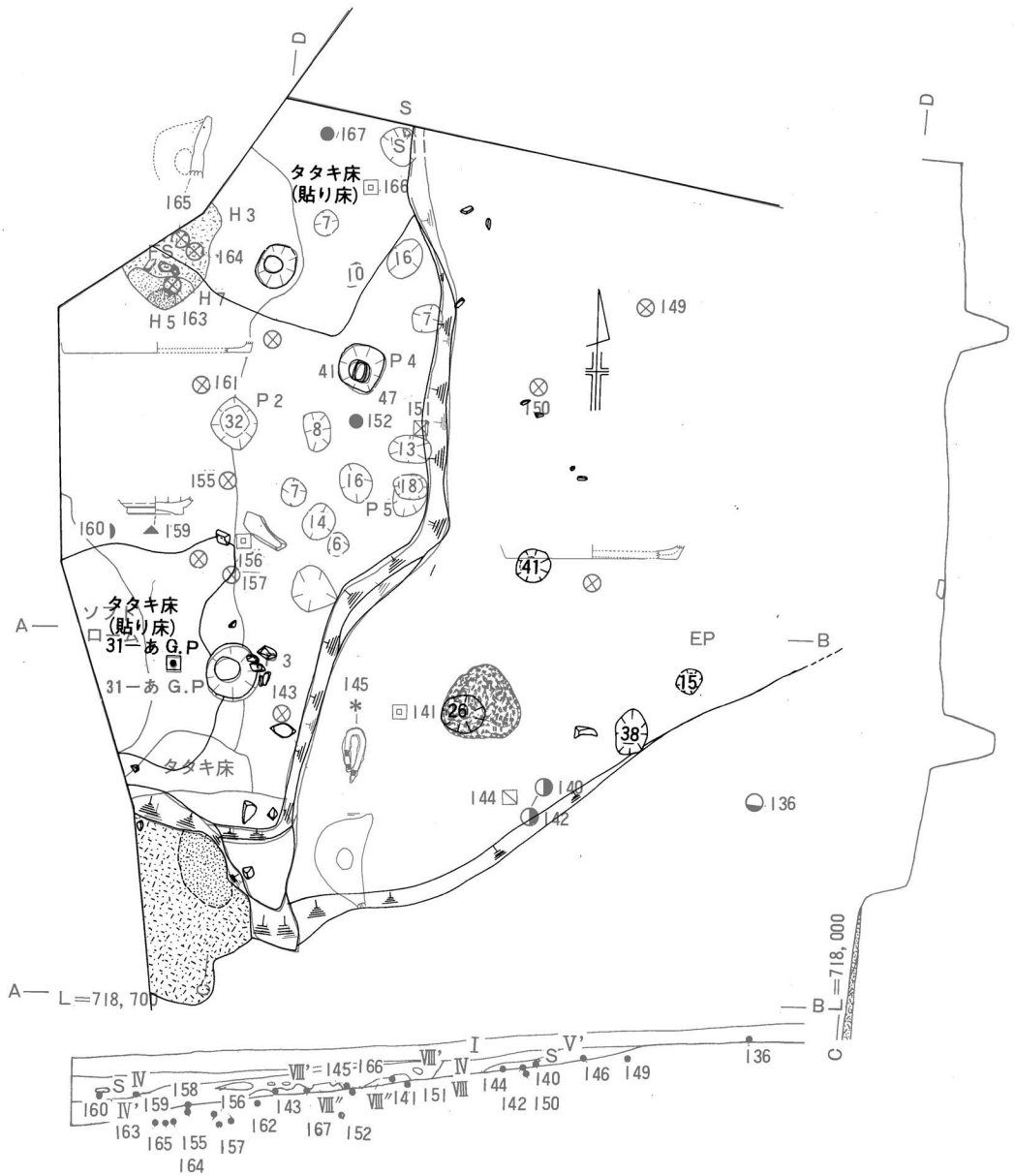
本跡は、礎石中心部より北東へ9mの地点から検出された。軸は、南北軸にほぼ近い。石質は花崗岩と花崗閃緑岩で7点が遺存し、中央の大きな石が花崗岩で長さ45cm、幅40cmを測り、ほか



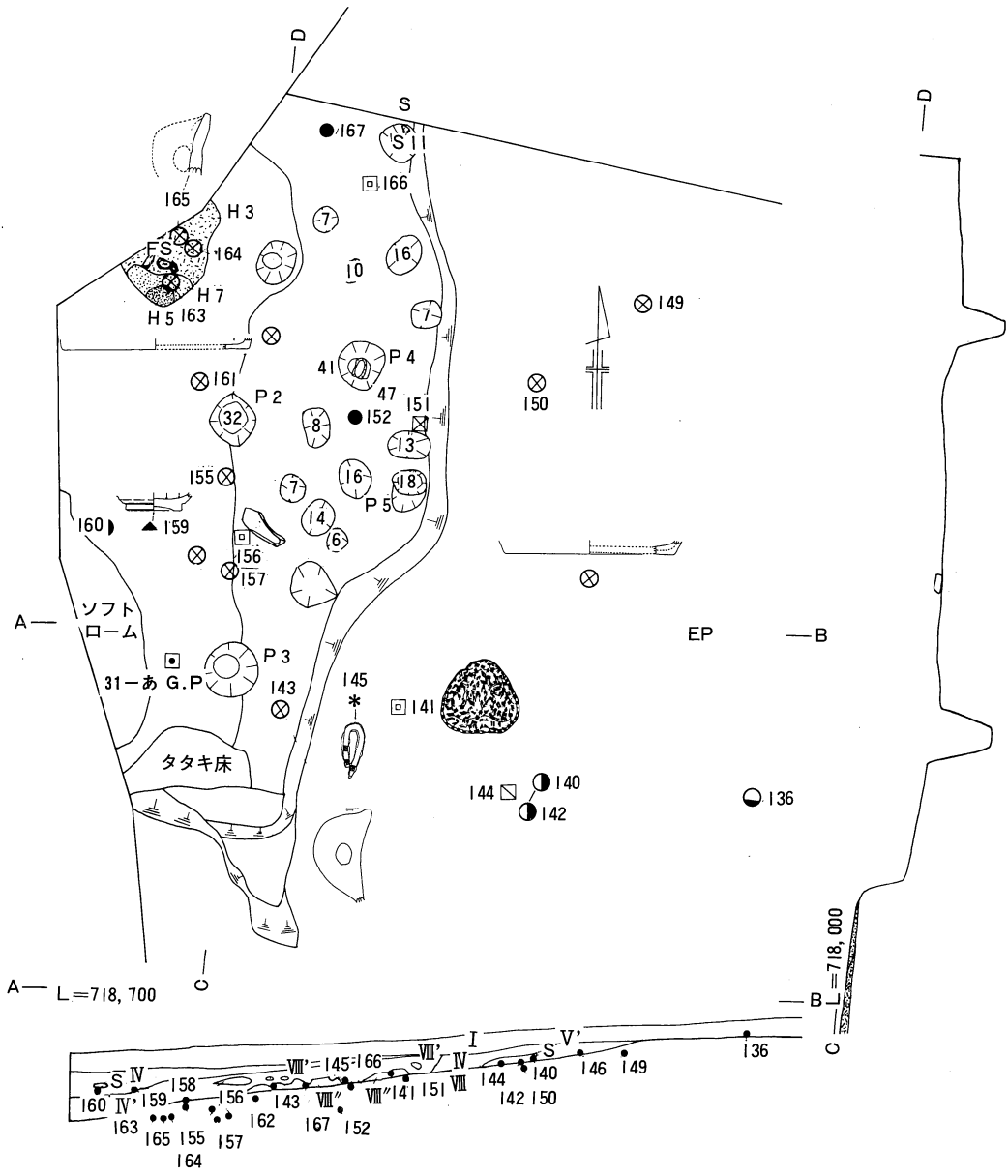
第9図 焼土集中箇所周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$, No. 7 ~ 157は $\frac{1}{6}$)



第5図 北区第1号住居跡実測図 (S = $\frac{1}{60}$)



第 5 図 北区第 1 号住居跡実測図 (S = $\frac{1}{60}$)



第6図 第1号住居跡実測図及び遺物分布図 (S = $\frac{1}{60}$)

は、長さ15～35cm、幅20cm前後を測る。周辺からは、青磁、常滑甕等が出土している。

配石遺構2(第8図)

本跡は、北区と南区の境の農道下から検出され、礎石からの距離は9mを測る。石質は花崗閃緑岩と花崗岩が半々である。主として、長さ50cm、幅35cmの石が、東南東位に2列に配石されている。周辺から少し離れて、内耳片と内黒土師器片が出土している。

焼土集中箇所(第8図)

本跡は、26一さG・P周辺の木炭・焼土集中区を除くと、広・狭範囲を合せて、8ヶ所検出され、最広範囲で、3m×1m、最狭範囲で直径35cm位で、厚さは平均3～4cm位である。最広範囲の集中箇所の北端には、直径20cm、深さ30cmのピットが存在するが、ほかのピットが周辺からは検出されなかった。周辺からは、天目、常滑、青磁(碗)、施釉陶器等が出土している。

木炭・焼土集中箇所(第8図)

本跡は、26一さG・Pの周辺に、現況で5m50cm×4m50cm位の不整形形状に集中分布している。26一さG・Pの北側に特に焼土が集中、南側に木炭が集中、さらに南に少し離れて焼土が集中している。堆積はあまり厚くなく、1cm位である。周辺からは、常滑、青磁香炉、施釉陶器が出土している。

第3節 調査南区遺構と遺物(第10～20図、写真5～8)

第1号集石址(第10・11図、写真6)

本跡は、南区にあって北区との境に近く、16一さG・Pから南西方向6mの地点に位置する。規模は、東西1m60cm、南北1m40cmのほぼ円形をしていて、中央に90cm×80cmの五角形をした花崗閃緑岩が遺存し、周辺に数多くの直径10～20cmの閃緑岩が集中している。周辺からは、須恵器、土師器(内黒)、灰釉(大口壺か?)、天目、内耳、常滑、施釉陶器、少し離れて、鉄製品、施釉陶器、と石、打製石斧等が出土している。すぐ南に接して、東西に砂利層が35cm前後堆積し、Dグリッドまで、長さ12m、幅1m30cm前後で続き止っている。本跡から北西に向って比高差20cmの傾斜で北区配石遺構2へ上って行くマウンド状の傾斜地がある。

第2号集石址(第12・13図、写真6)

本跡は、6一かG・Pから北北西3m50cmの地点に位置し、北東に長さ85cm、幅75cmの三角形に近い、花崗閃緑岩の自然石が遺存している。規模は、東西1m20cm、南北1m20cmで密度の薄い円形状をしている。周辺からは、施釉陶器(瀬戸・美濃産)、打製石斧、磨製石斧、縄文土器片が出土している。

柱穴址群(第14・15図)

本跡は、11一さG・P周辺より検出され、P₁～P₁₆までの計16本が確認された。柱穴のプランはほぼ円形をしていて、深さは、8cm～49cmとまばらである。軸はややずれるが、柱穴址群のプ

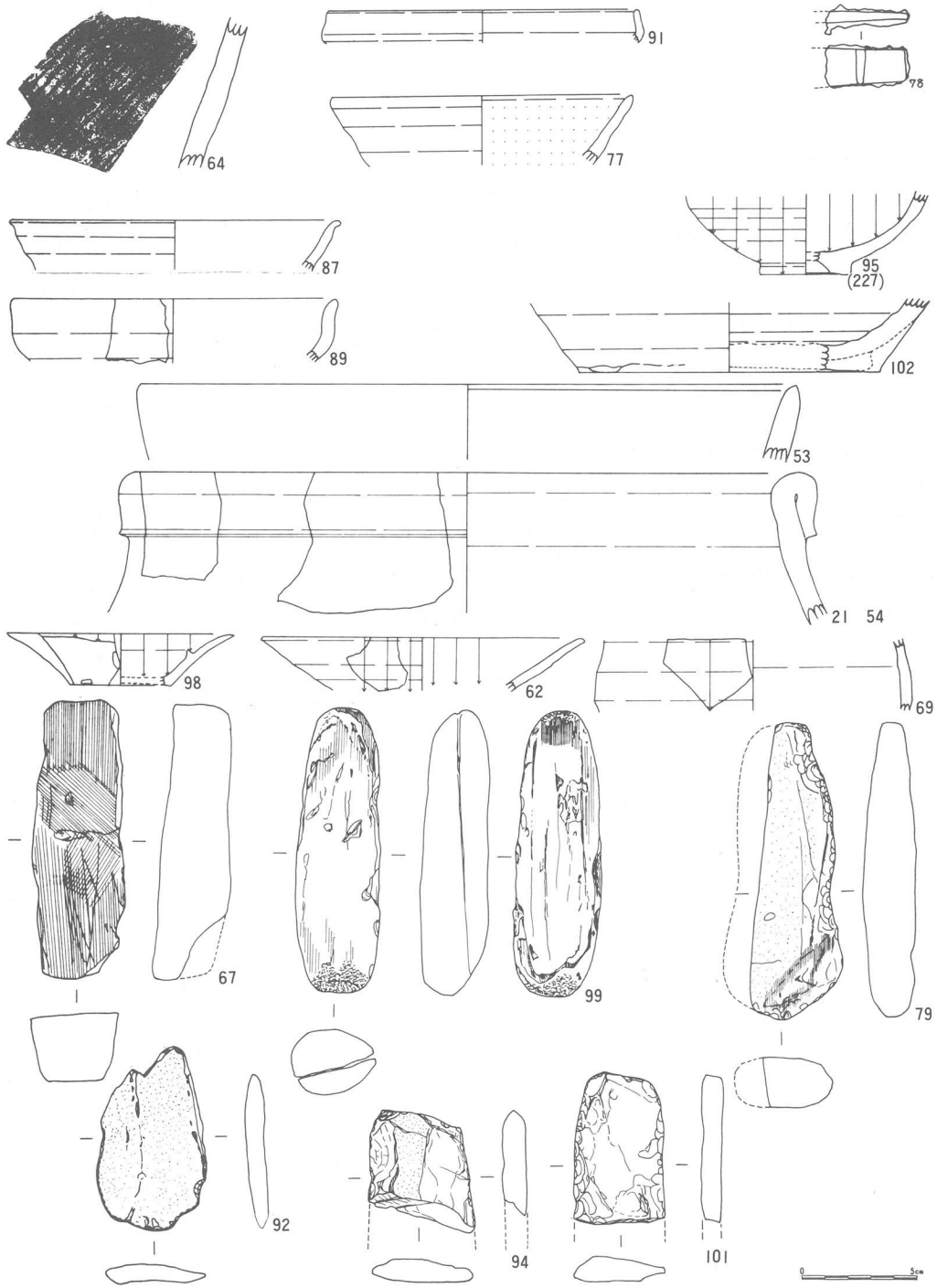
ランは東西軸の長方形と考えられ、P₁～P₉までがそれにあたる。P₂・P₄・P₇が8～13cmと浅いのが気になる。柱穴址群の中央南西に焼土が、直径35cmの方形に3cmの厚さで遺存していた。なお、北側には、直径50～100cmにかけての大きさをもつ花崗閃緑岩の自然石が遺存している。周辺からは、人目、施釉陶器(瀬戸・美濃産)、縄文土器片等が出土している。

南の堀(第16・17図, 写真7)

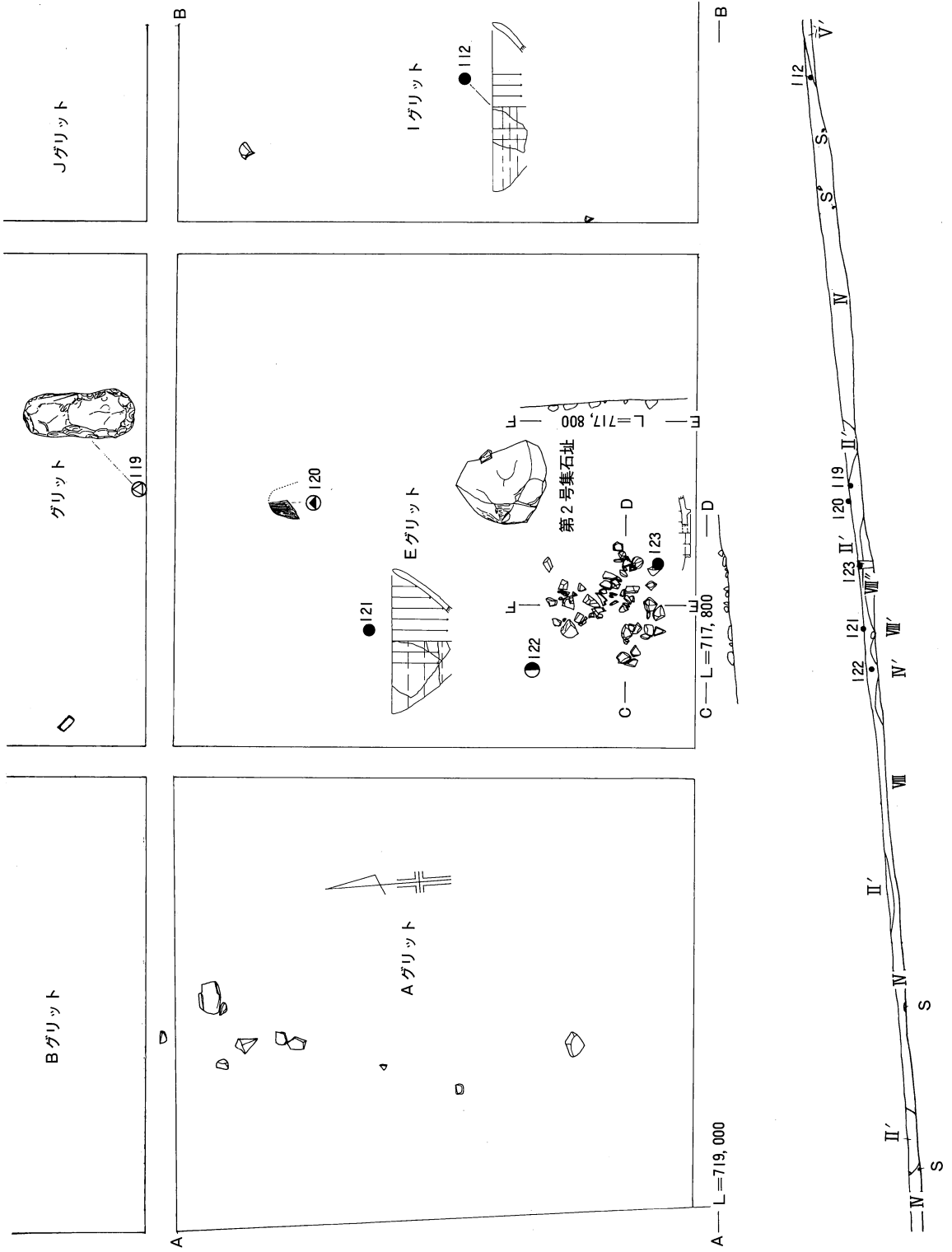
本跡は、南区の南端より検出され、6一さG・Pから1一あG・Pへと北へやや弓なりとなっている。現地では、長さ21mが検出され、東と西へ延びる様相をしている。東端では、幅2m10cm、深さ60cm、中央部で、幅2m、深さ60cm、西端で、幅3m70cm、深さ75cmと徐々に西に向って広がって行く。堀堆積土層の礫の高さは、東で高く、西で低い。最下層には、褐色土+砂利の混土が堆積しており、流水の痕跡をもつ。出土遺物は、No.169の施釉陶器のみが堀内から出土し、周辺からは、施釉陶器(近世)、古銭(寛永通宝)、打製石斧等が出土している。

敷石火葬墓(第18～20図, 写真8)

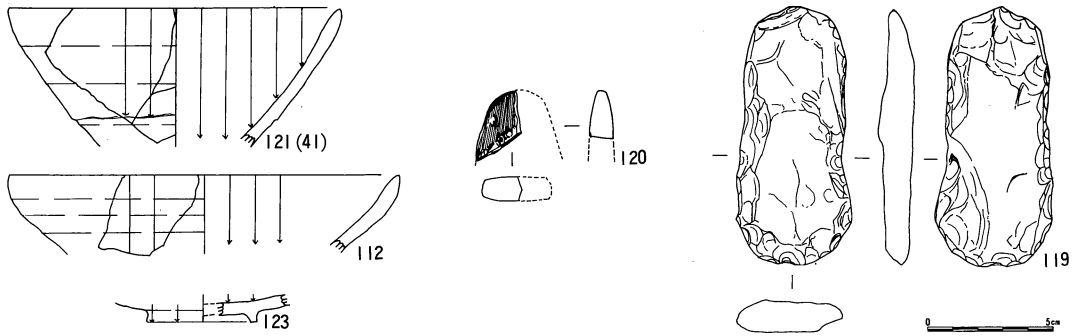
本跡は、南の堀の西端の黒褐色土層から検出され、東西3m、南北1m50cmの楕円形状に、木炭粒が分布し、IとIIベルトの間に敷石火葬墓が遺存していた。堀に直交して、長さ45～65cm、幅20～35cm、厚さ20cm前後の花崗閃緑岩が5点敷かれ、東側には短い石を補うかのように、長さ20～30cm、幅15cm、厚さ15cm前後の花崗岩2点と花崗閃緑岩2点が敷かれていた。規模は、南北1m50cm、東西1m10cm、深さ30cmを測る。敷石上には、関節部状の骨片、尺骨・上腕骨状の骨片、焼土、木炭が5～10cmの厚さで遺存していた。出土遺物は、灰釉、施釉陶器が出土している。



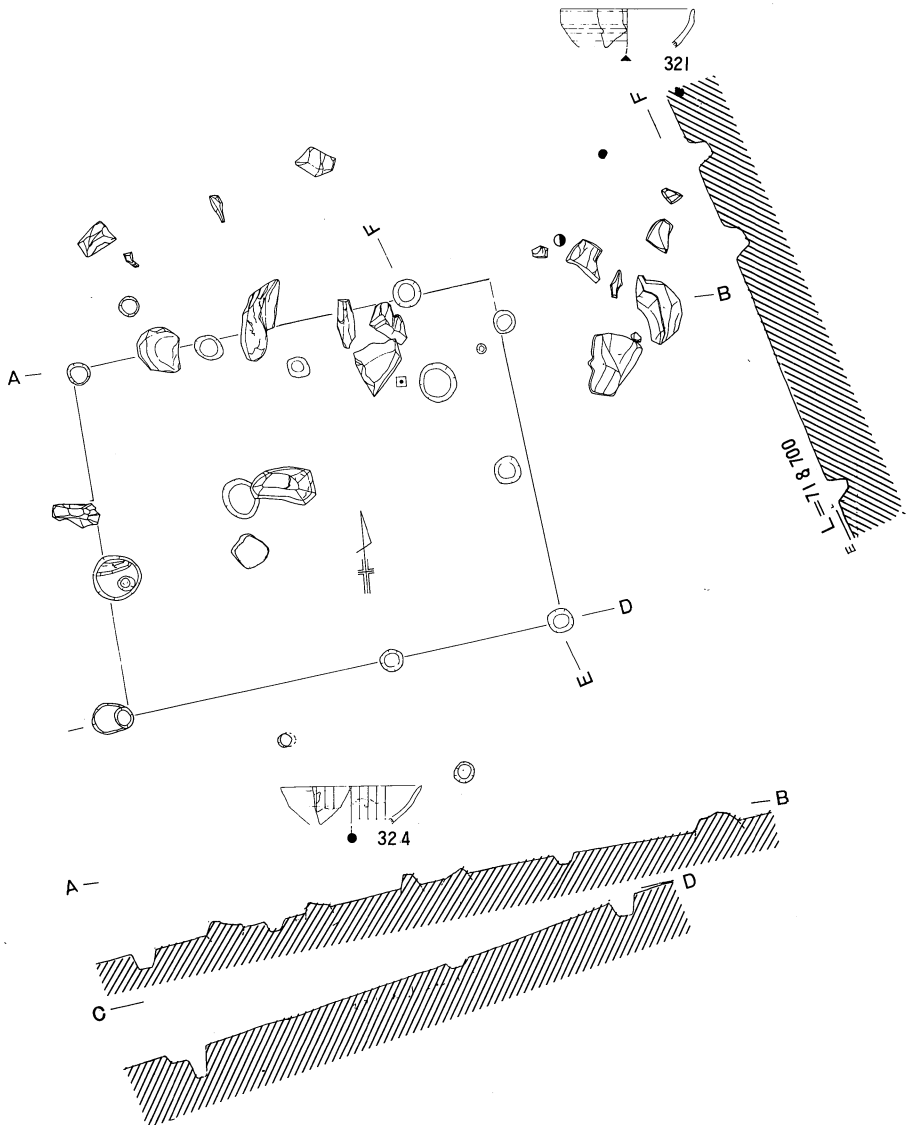
第11図 第1号集石址及び周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)



第12図 南区A・B・E・F・I・Jグリッド，第2号集石址実測図及び出土遺物分布図（ $S = \frac{1}{60}$ ）

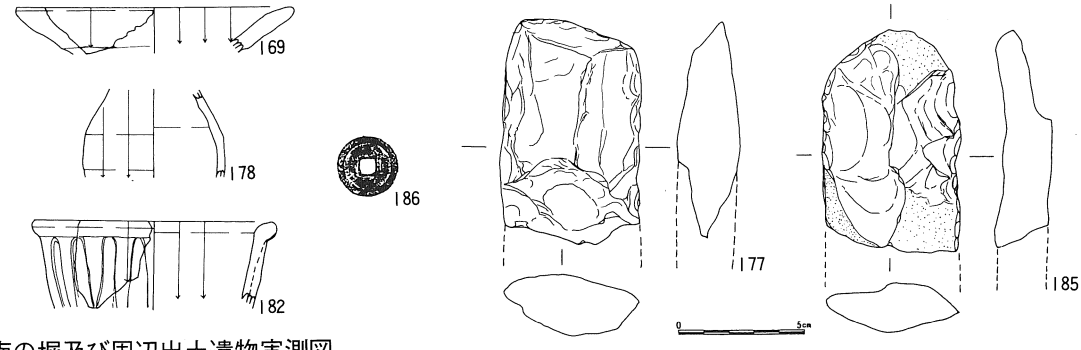


第13図 第2号集石址及び周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

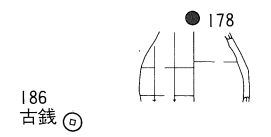
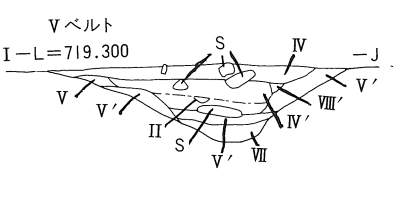
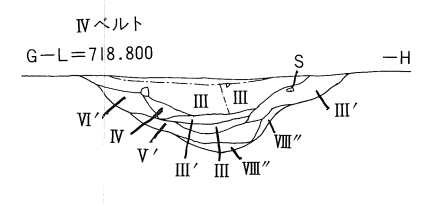
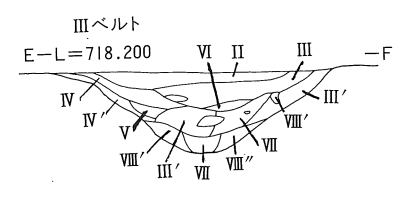
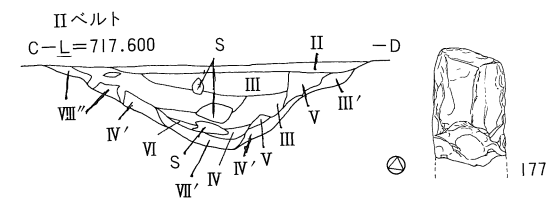
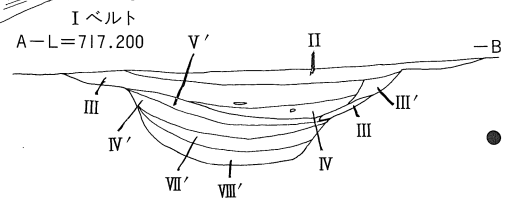
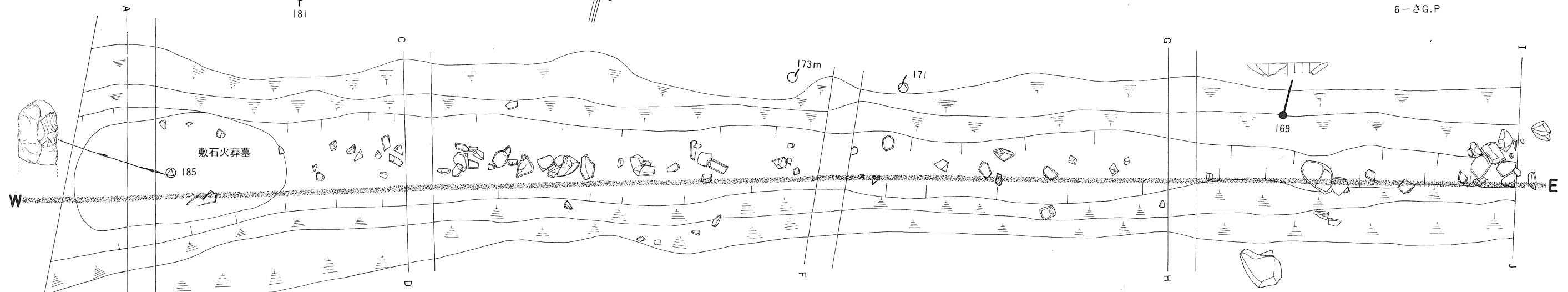
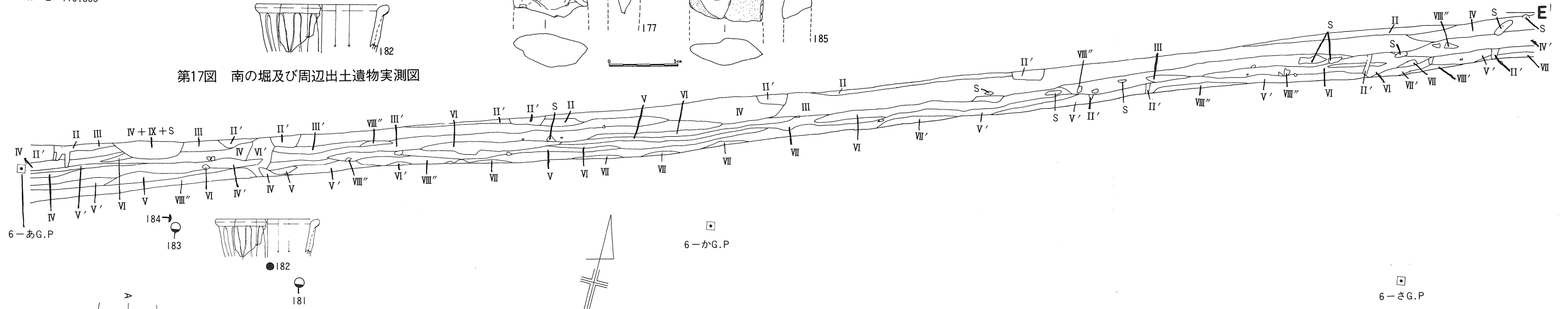


第14図 柱穴址群実測図及び遺物分布図 (S = $\frac{1}{60}$)

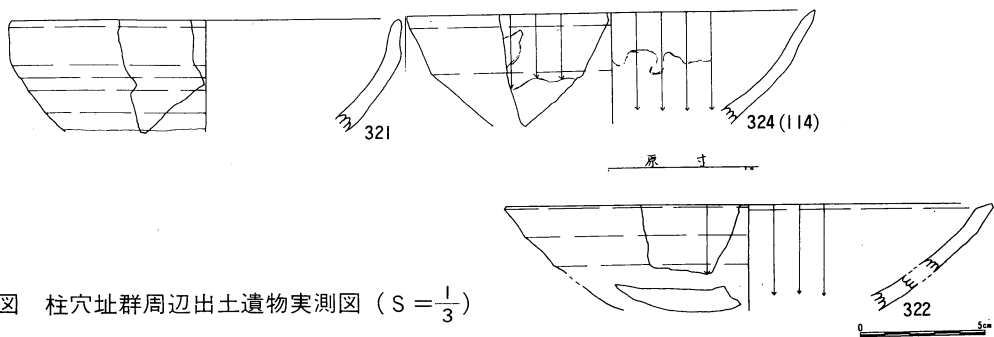
W-L=719.300



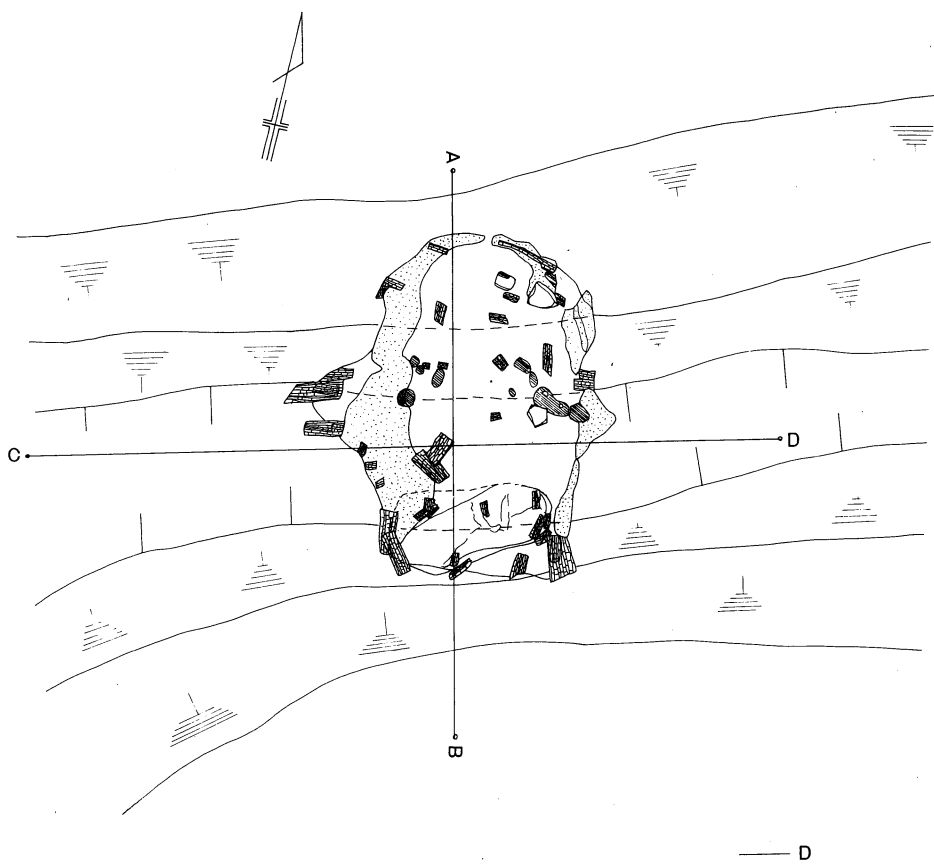
第17図 南の堀及び周辺出土遺物実測図



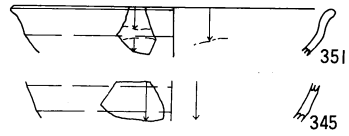
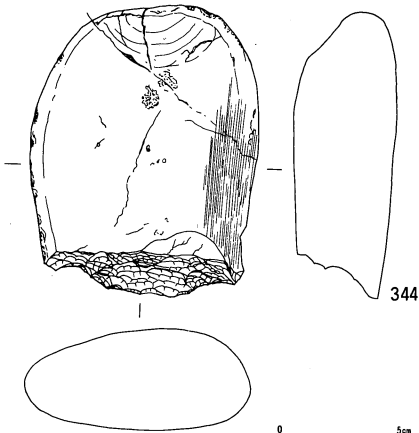
第16図 南の堀実測図及び遺物分布図 (S = 1/60)



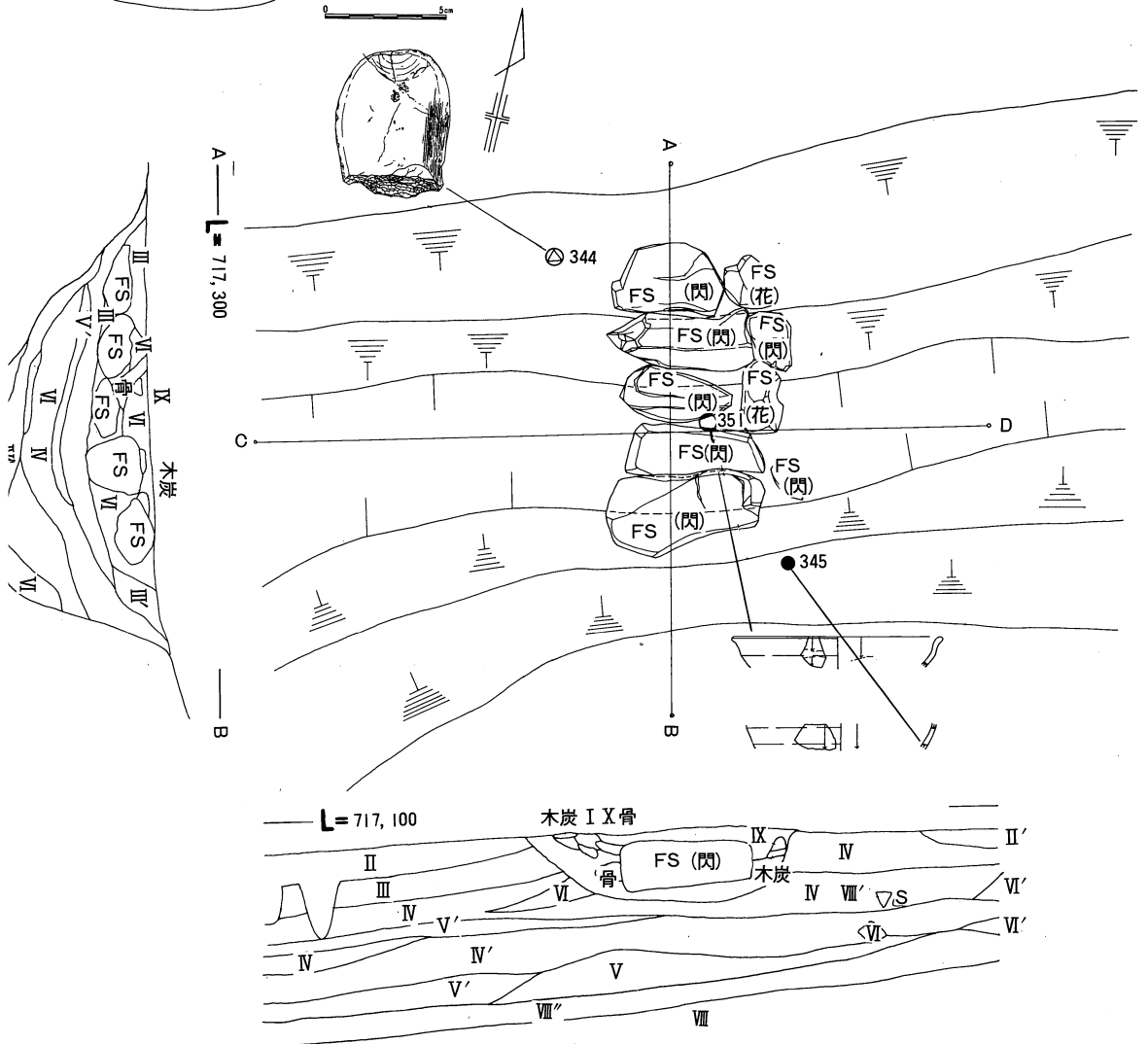
第15図 柱穴址群周辺出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{3}$)



第18図 敷石火葬墓実測図 (S = $\frac{1}{30}$)



第19図 敷石火葬墓及び周辺出土遺物
実測図 (S = $\frac{1}{3}$)



第20図 敷石火葬墓実測図及び遺物分布図 (S = $\frac{1}{30}$)

出土遺物一覽表

番号	挿図	種別											形態	時代及び時期	計測値				特徴	
		土器	石器	土師器	須恵器	灰釉	施釉	天目	常滑	青磁	内耳	染付			古銭	鉄製品	高さ (長さ)	口径 (幅)		胴径 (厚さ)
1	第9図														碗, 口縁部	14C(中国)	7.6	17.6	4.8	釉一淡緑色, 胎土一灰白色, 蓮塞文
2	"														底部	18C			3	釉一淡灰色, 胎土一灰白色, 底部へラ切り
3	"														仏花器, 胴部	15C前半			66	器壁厚0.6-1cm, 内面成形痕顕著, 胎土一灰白色
4															茶わん, 胴部	15C前半				器壁に二重かさねの痕顕著
5															皿, 胴部	11C				
6				(○)											硬砂岩剥片	縄文				
7	第9図														甕, 胴部	半ば	33	47.6		器壁厚1cm内外, 釉一赤味を帯びた茶褐色, No.20同
8															茶わん, 口縁部	15C半ば				
9															茶わん, 胴部	18C				
10															皿, 口縁部					
11	第9図														底部	15C~16C			26	No.53と同一
12	"														茶わん, 胴部	15C		16.8		器壁厚6mm内外, 色調一淡緑色, 胎土一灰白色
13	"														茶わん, 口縁部	15C		12.2		器壁厚5mm, 口縁部やや外反, 胎土一灰白色, あめ色
14	"														甕, 頸部	16C				色調一暗緑色, 胎土一灰緑青色
15				○											石鏝, 未製品	縄文				
16	第9図														甕, 胴部	15C半ば	33	47.6		器壁厚1cm内外
17															碗, 底部	14C(中国)				釉一淡緑色, 胎土一灰白色
18				○											打製石斧, 短冊形	縄文			65g	片残
19															茶わん, 胴部	18C				
20	第9図														甕, 口縁部	14C~15C	33	47.6		器壁厚1cm内外
21															甕, 口縁部	15C半ば	28.8			器壁厚1cm内外, 赤味を帯びた茶褐色釉, 折返し口縁
22															胴部	15C~16C				
23				○											内黒土師坯底部	11C				糸切り底
24	第9図														甕, 胴部	15C半ば	33	47.6		器壁厚1cm内外
25	-														_____	_____				輝緑岩
26															_____	_____				火鉢, 口縁部印花文
27				(○)											石英塊, 火打石	中世				
28	第9図														甕, 胴部	15C半ば	33	47.6		器壁厚1cm内外
29	"														香炉, 口縁部	14C(中国)	8.2	12.6	13	釉一緑色, かん入, 胎土一暗灰白色, 内面一ススける
30	"														甕, 胴部	15C半ば	33	47.6		器壁厚1cm内外
31				○											深鉢形, 胴部	縄文				
32															木炭					
33	第9図														茶わん, 口縁部	15C		16.8		器壁厚6mm内外, No.12と同一
34				(○)											石英塊					
35				○											土師坯, 底部	11C				
36															坯, 口縁部	11C				
37				(○)											硬砂岩剥片	縄文				
38															胴部	15C半ば				
39															茶わん, 胴部		5.6	18.8		器壁厚4~6mm, 釉は淡黄緑色
40				○											深鉢形, 胴部	縄文				
41															茶わん, 口縁部	15C		13		器壁厚5mm, 片個体, 色調一淡緑色, 胎土一灰黄白色
42															石英塊					
43															胴部	15C~16C				スス付着
44				○											土師甕, 胴部	11C				
45				○											硬砂岩剥片	縄文				
46				○											黒耀石剥片	"				
47															胴部	11C				平行叩き目
48															瓦破片	近代				

番号	挿 図	挿 別											形 態	時代及 び時期	*計 測 値				特 徴				
		土器	石器	土師器	須恵器	灰釉	施釉	天目	常滑	青磁	内耳	染付			古銭	鉄製品	高さ (長さ)	口径 (幅)		胴径 (厚さ)	底径 (重さ)		
100			(○)												黒輝石剥片	縄文							
101	第11図		○												打製石斧短冊形	〃	(6.5)	3.9	1.1	41g		刃部欠く、硬砂岩	
102							○								すり鉢底部	15C				13		色調一暗茶褐色、胎土一灰褐色 底部製作手順顕著	
103		○													深鉢形胴部	縄文中期前半						竹管文	
104							○								すり鉢	15C							
105		○													深鉢形、胴部	縄文中期前半							
106		○							○						茶わん胴部	15C							
107		○													深鉢形、頸部	縄文中期							
108					○										甕胴部	11C							
109			○												と石、棒状	中世				426g		凝灰岩	
110											○				茶わん 胴部	18C							
111	-																						
112	第13図						○								茶わん口縁部	15C			15.4			器壁厚6mm内外、色調一淡緑色 胎土一灰白色	
113			(○)												貢岩	縄文							
114	-																		16.2			器壁厚4~5mm	
115			(○)												長石								
116			(○)												長石								
117			(○)												長石								
118			(○)												長石								
119	第13図		○												打製石斧短冊形	縄文	10.3	4.6	1.3	93g		硬砂岩、完形	
120	〃		○												磨製石斧	〃	(2.8)	(1.8)	1.0	5g		片岩	
121	〃						○								茶わん胴部	15C							
122		○													深鉢形胴部	縄文中期前半							
123	第13図						○								底部	18C				4.2		付高台、色調一淡灰色、胎土一 灰白色、ヘラ切り	
124	-																						
125			○												打製石斧破片	縄文							刃部のみ、硬砂岩
126	第9図						○								茶わん口縁部	15C前半			15			器壁厚6mm、釉一黒茶褐色、胎 土一灰白色、やや外傾	
127	〃						○								茶わん胴部	〃						器壁厚6mm内外、釉一黒色、胎 土一灰黄白色	
128	〃													○	板状	中世~近世	(2.8)	2.2	0.3			折り返しあり	
129												○			茶わん口縁部	18C							
130	第9図						○								皿口縁部	15C			7.8			器壁厚4mm、色調一淡黄白色、 胎土一乳白色	
131														○	口縁部	15C~16C							
132	第9図						○								灯明皿	18C			(4.8)				
133		○													深鉢形胴部	縄文							
134			○												すり石	〃						砂岩	
135			○												と石	中世							粘板岩
136														○	茶わん胴部	18C							
137	第9図						○								甕胴部	15C半ば			33	47.6		器壁厚1cm内外	
138			(○)												硬砂岩剥片	縄文							
139														○	茶わん底部	18C							
140	第7図	○													深鉢形胴部	縄文中期前半						竹管文、色調一明褐色、胎土一 粗い長石・石英含む	
141	〃		○												石英塊火打石	中世	4.5	4.8	3	88g		全面打撃痕あり、おむすび形	
142	〃	○													深鉢形胴部	縄文中期前半						No140と同一個体竹管文	
143	〃													○	内耳部	15C~16C						内耳径1.6×1.2の楕円形、色調 一暗褐色、口唇部内面平坦	
144	〃						○								甕胴部	15C						器壁厚1cm内外、こまかい長石 内外へラナテ赤褐色	
145	〃													○	棒状	中世~近世	8	5	4				
146	〃													○	底部	15C~16C				20		色調一明褐色、胎土一精選砂粒	
147			(○)												砂岩剥片								
148	-																						
149														○	胴部片	15C~16C							
150														○	口縁部	〃							表面スス付着

番号	挿図	種別											形態	時代及び時期	*計測値				特徴			
		土器	石器	土師器	須恵器	灰釉	施釉	天目	常滑	青磁	内耳	染付			古銭	鉄製品						
151			○												敲打器、棒状	縄文					両端たたく	
152						○									すり鉢胴部	18C						
153	-																					
154	-																					
155				(○)											胴部片	15C~16C						表面スス付着
156															石英片							
157															胴部	15C~16C	33	47.6				器壁厚1cm内外
158															〃	〃						
159	第7図					○									茶わん底部	15C前半				4.4		削り高台、釉一黒色、胎土一灰白色、内面釉厚い
160				(○)											黒耀石剥片	縄文						
161															胴部	15C~16C						
162															〃	〃						スス付着
163															底部	〃				21.8		色調一暗褐色、胎土一精選砂粒
164															胴部	〃						表面スス付着
165	第7図														口縁部	〃						色調一暗褐色、胎土一精選砂粒
166				(○)											長石塊							
167						○									茶わん胴部	15C						
168				(○)											輝緑岩							
169	第17図					○									灯明皿	15C				10.8		器壁厚6mm内外、色調一淡緑色胎土一灰白色
170				(○)											輝緑岩							
171				(○)											硬砂岩剥片	縄文						
172															輝緑岩							
173				○											すり石	縄文						花崗岩
174				(○)											輝緑岩							
175	-																					
176				(○)											硬砂岩剥片	縄文						
177	第17図			○											打製石斧短冊形	〃	(8.9)	5.5	2.4	137g		刃部欠く、硬砂岩
178	〃					○									小壺胴部	18C				5.2		器壁厚3mm、色調一淡灰色、胎土一灰白色
179						○									皿胴部	11C						
180				(○)											硬砂岩剥片	縄文						
181															茶わん、口縁部	18C						1/6個体
182	第17図					○									碗口縁部	16C末				9.4		器壁厚3mm、胴部にすだれ状文の彫り込み、色調一灰白色
183															茶わん口縁部	18C						
184				(○)											黒耀石剥片	縄文						
185	第17図			○											打製石斧短冊形	〃	(8.8)	5.4	2.0	118g		刃部欠く、硬砂岩
186	〃														寛永通宝	17C						
191						○									茶わん胴部	15C前半						
192						○									皿口縁部	15C						
193						○									茶わん口縁部	〃				19.2		器壁厚6mm、色調一淡緑色、胎土一灰黄白色
194						○									〃	〃				19.2		No.193と同一個体、器壁厚6mm内外
195				(○)											硬砂岩剥片	縄文						
196															茶わん	18C						
321	第15図					○									茶わん口縁部	15C				15.4		器壁厚6mm、釉一黒褐色、胎土一灰白色、やや外傾
322	〃					○									〃	〃				19.2		器壁厚5mm前後
323				○											深鉢形胴部	縄文中期						
324	第15図					○									茶わん口縁部	15C						
325						○									皿胴部	〃						
344	第19図			○											敲打器	縄文	11.6	9.0	3.9	540g		硬砂岩、階段状剥離、側面一敲打、上面一する
345	〃					○									皿胴部	15C				11.6		器壁厚4mm
351	〃					○									坏、口縁部	11C				12.6		器壁厚3mm

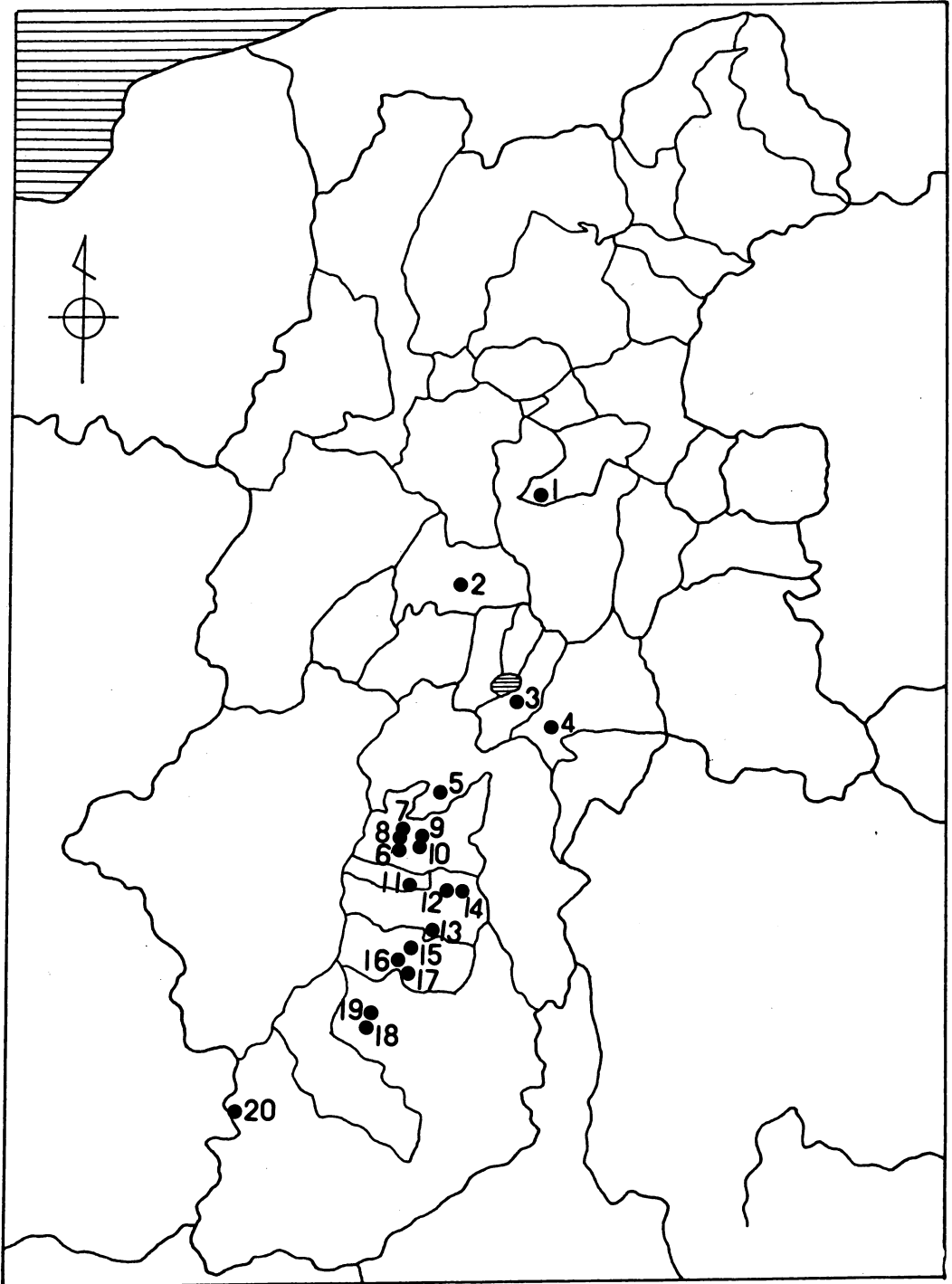
*計測値の単位は高さcm、口径cm、胴径cm、底径(重さ)cm(g)で。

長野県内青磁器・白磁器等出土遺跡一覧表（概略表）

No.	遺跡名	出土遺構	青磁	白磁	他	時代	備考	No.	遺跡名	出土遺構	青磁	白磁	他	時代	備考
1	塩田成	G-11グリッド	○			(中国)	7点(上田市)	14	青木	木炭・焼土集中	○			13~14C	1点(香炉)
	"			○		()	21点		"	遺構外	○			"	2点(碗)
	"				○	()	青花26点		"	B-グリッド	○			"	1点
2	松本工業高校	石垣河原砂利層	○			()	1点(松本市)		"	表採	○			"	1点
	"	トレンチ	○			()	1点		"	南の堀		○		近世	1点
	"	"		○		()	3点		"	D-グリッド		○		"	1点
3	武居畑			○		中世		15	唐沢城	第1号住覆土	○			宋	1点(飯島町)
4	御社宮司	堅穴状遺構	○			13~14C	3点(茅野市)		"	"		○			1点
	"	"		○		"	1点		"	第2号住覆土	○				3点
	"	礫群	○			"	3点		"	第1号柱穴址	○				1点
	"	EⅢ層	○			"	8点		"	第2号 "			○		白陶2点
	"	遺構外	○			"	3点		"	" "	○				4点
5	木下猿楽		○			江戸	1点(箕輪町)		"	" "		○			2点
6	山寺垣外	(遺構外)	○			(中国)	2点(伊那市)		"	北区その他	○				6点
7	城平	2号地下倉址	○			()			"	"		○			2点
8	大境		○			()			"	南区その他	○				5点
9	東方A		○			()		16	本郷中原		○			中国	2点(飯島町)
10	薬師堂		○			()		17	西ヶ原		○			江戸	2点(有田)
11	駒ヶ原下	遺構外		○		明治~大正	4点(宮田村)		"		○			中国	3点
12	上塩田	1号住覆土上層	○			13~14C	3点(駒ヶ根市)		"		○			江戸~明治	2点(3瀬戸産)
	"	トレンチ	○			"	3点		18	瑠璃寺前	遺構外	○		(中国)	(高森町)青木
	"	"		○		"	2点(青白磁)		"	"	○			()	中島地区
	"	C地区1グリッド	○			"	1点		"	溝2	○			()	"
	"	" 2グリッド	○			"	1点		"	溝3	○			()	"
	"	表採	○			14C~	1点	19	大島山東部	グリッド	○			()	
13	八幡	遺構外	○			13~14C	2点	20	御坂峠			○		()	9点(阿智村)

上記の一覧表及び第22図の分布図のように、長野県内から(当報告時点の所蔵県内報告書に限る)は、20ヶ所の遺跡より青・白磁等が出土している。中国製、日本製、不明なものがあり、正確な資料把握ではない。報文によると、茅野市御社宮司遺跡及び飯島町唐沢城出土のものが、本跡出土のものと同様に近似していると考えられるが、未だ筆者は実見していない。

陶磁器が出土する例が少ないことと、報文で明らかでないこと、資料分析・判断に困難等の点から集大成は難しいが、今後の報文を待ちたい。



第22図 長野県内青・白磁器等出土遺跡分布図

2. 白磁器

当遺跡からは、2点の白磁器が出土している。No.225は、碗口縁部片で、10分の1個体である。推定口径12.4cmで、器壁厚は3.5mmを測る。釉調は、淡白色で、胎土色は、白色である。釉の厚さは、0.5~1mmである。表面口唇部に一条の横走沈線が入る。もう1点は、皿(?)の破片と考えられ、器壁厚は、4mmを測る。釉調は、淡青白色で、胎土色は、白色である。釉の厚さは、0.5mmである。罅割が入り、内面底部よりに、刻線がある。

以上、2点は、近世に日本で焼かれた白磁器と考えられる。

3. 天目

当遺跡からは、数多くの碗等の破片が出土している。ここでは、本文中に図化したものを、主に考察する。

No.3は、仏花器胴部片で、釉調は、くすんだ黒褐色で、胎土色は、灰白色である。内面に成形痕が顕著である。No.13は、茶碗口縁部片で、口唇部あめ色で、胴部にかけては、黒褐色で、胎土色は、灰白色である。口唇部はやや外反する。No.89は、口碗口縁部片で、釉調は、口唇部茶褐色、胴部にかけては黒褐色で、胎土色は、灰白色である。口唇部はやや外反する。No.126は、茶碗口部片で8分の1個体の大きさである。釉調は、口唇部茶褐色、胴部にかけては黒褐色で、胴下部は、釉だまりしている。No.89の釉調に近似する。口唇部は、やや内傾する。胎土色は、灰白色である。No.127は、茶碗胴部片で、釉調は、黒褐色であるが、焼成時の温度でただれている。胎土色は、灰黄白色である。No.159は、第1号住より出土した。茶碗底部片で、釉調は、黒褐色で、内面には、5mm前後、釉がたまっている。胴土色は、灰白色である。底部は、削り高台である。No.321は、茶碗口部部片で、釉調は、あめ色がかった黒褐色で、胎土色は、灰白色である。口唇部はまま外傾している。

以上の考察からみると、器形では、仏花器、茶碗で、釉調は、黒褐色が主体で、一部にあめ色がかかる。胎土色は、灰白色か、灰黄白色である。口唇部は、全体的にやや外反及び外傾をしている。底部では、削り高台である。

これらのことから、天目の製作年代は、15世紀前半と考えられる。

4. 常滑

当遺跡からは、大きくわけて2個体の常滑大甕の破片が出土している。1個体は、No.20・16・20・24・28・30・137・144・157の同一個体のもので、推定口径は、33cm、推定胴径は37.6cmを測る。器壁厚は1cm前後である。色調は、胴上部で赤味を帯びた茶褐色、胴下部で、赤褐色をしている。胎土には、粗い長石・石英粒を含む。胴下半部にはへラでの成形痕がみえる。二

重口縁。もう1個体は、No.21・54の同一個体のもので、推定口径28.8cm、器壁厚は1cm内外。色調は、若干赤味を帯びた鉛色調茶褐色で、胎土には長石・石英を含む。

以上、2個体は、15世紀半ばの常滑で焼かれた大甕と考えられる。

5. 瀬戸・美濃陶器(当陶器は、施釉陶器として、一覧表には一括した)

当遺跡からは、天目を上回る数で多くの瀬戸・美濃産の陶器が出土している。天目同様、図示できたものを主に考察する。

No.12, 33は、同一個体で、茶碗口縁部片で、5分の1個体の大きさである。釉調は、淡緑色(黄色がかかる)で、胎土色は、灰黄白色をしている。釉は、外面が著しく、焼成時の温度で、ただれている。口唇部は、外傾している。No.39は、茶碗明部片で、釉調は、淡黄緑色である。胎土色は、灰白色である。焼成は良好。器壁厚は、6～7mmを測る。

以上は、いわゆる黄瀬戸と呼ばれる陶器で、天目と同時代で、15世紀前半に瀬戸及び美濃で焼かれたもので、瀬戸産に近似すると考えられる。

6. 白 瓷

当遺跡からは、数点のものが出土しているが、図化できたものを考察する。

No.62は、皿口縁部片で、色調は、淡褐色で、胎土色は、灰白色である。No.91は、広口壺の口縁部片と考えられ、釉は無く、色調は、灰色で、胴土色は、灰青色で、芯部は半焼らしい。

以上2点は、11世紀東濃産の白瓷と考えられる。

7. 内耳土器

当遺跡からは、20点に近い数が出土している。

No.11は、底部片で、色調は明褐色で、胎土には、精選された砂粒を含む。No.53は口縁部片、No.146は底部片、No.143・165は内耳部片(No.165は、外面にオコゲ付着)、No.163は底部片である。

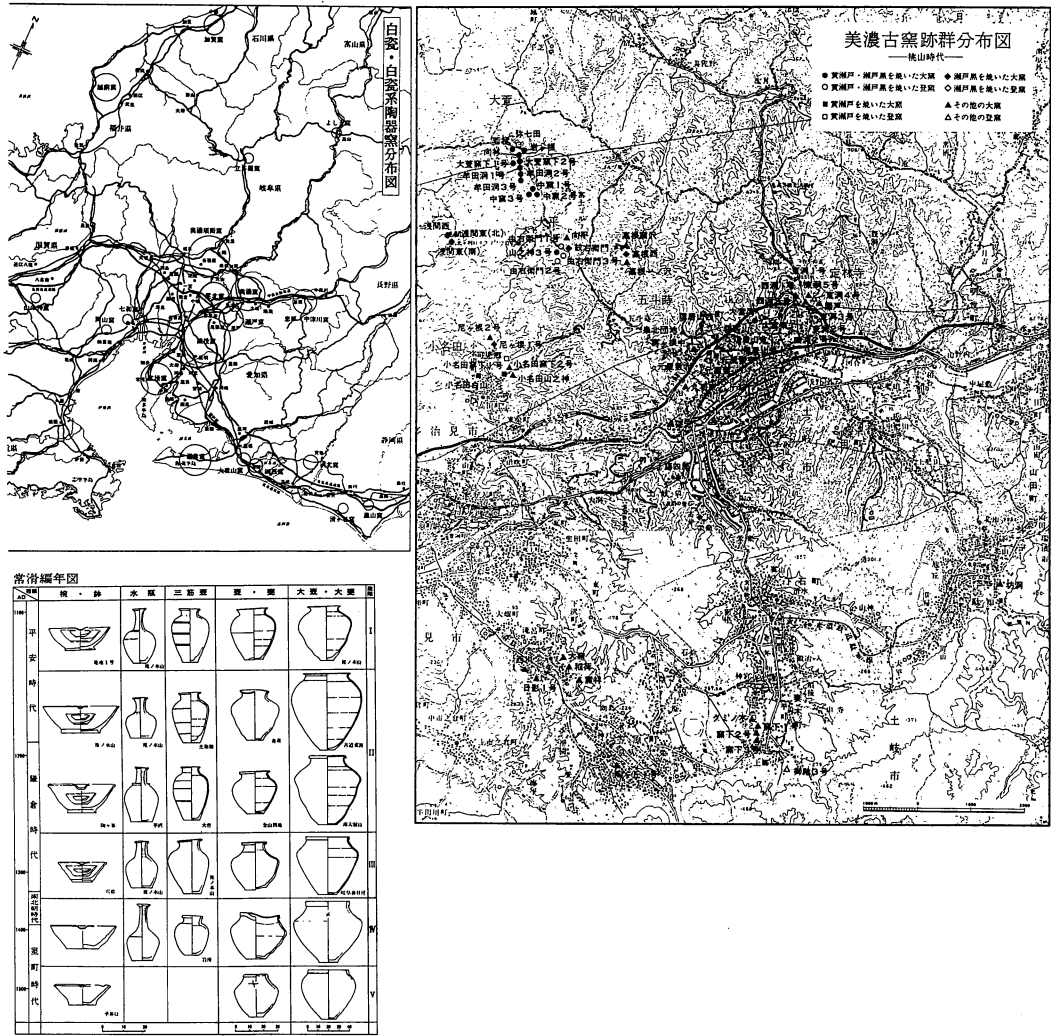
総じて、色調は、明褐色から暗褐色をしていて、胎土には、精選された砂粒を含む。いずれも内耳鍋破片である。

内耳土器についての検討は、茅野市御社宮司遺跡で詳細ではあるが、本跡出土のものは、前記報文で言う、II～III期(15世紀代)に属すが、15世紀から16世紀にかけてと考えられる。

8. 近世以降の陶器

当遺跡からは、天目、瀬戸・美濃陶器(15世紀前半に属するもの)を上回る数で出土している。

No.2は、茶碗底部で、釉調は、明灰白色で、胎土色は、灰白色である。底部は、付け高台で、へら削りしている。No.123は、皿底部片で、釉調は、淡灰色で、胎土色は、灰白色である。底部は、付け高台で、へら削りしている。No.132は、灯明皿胴部片で、釉調は、暗灰色で、胎土色は、



第23図 白瓷・白瓷系陶器窯分布図・美濃古窯跡群分布図・常滑編年図
 (「日本陶磁全集 6・8・14」より抜粋)

暗灰色である。No.130は、灯明皿口縁部片で、釉調は、淡黄白色で、胎土色は、乳白色である。No.182は、碗(?)の口縁部片で、釉調は、灰白色で、胎土色は、同じく灰白色である。すだれ状の彫り込みが縦位になされている。

以上は、釉調、胎土色、製法からみて、18世紀の瀬戸・美濃産の陶器と考えられる。

No.8・129・136・181は、染付茶碗口縁部片で、釉調は、明白色で、胎土色は、白色及び灰白色(No.181)である。酸化コバルトで、すだれ状文やささ状の絵が付けられている。

No.8・129・136は、有田産、181は瀬戸産と考えられ、18世紀～19世紀製作のものと考えられる。

9. 石 器

本跡では、打製石斧、敲打器、磨製石器、火打石、黒耀石剥片が出土している。総体的な考察は略すが、No.141の火打石は、中世に属し、No.344は縄文早期末頃に属すと思う。

第2節 遺 構

遺構の時代考察を簡単に記したい。出土遺物及び遺跡の性格から判断する。

第1号住居跡は、天目・内耳等から、15世紀前半から16世紀初頭として位置けたい。焼土集中箇所、焼土・木炭集中箇所、配石遺構1・2、礎石も、同様に位置付ける。

第1号・2号集石址、柱穴址群は、直接判断する資料は不足しているが、15世紀から16世紀と位置付け、南の堀も同様である。

敷石火葬墓は、明らかに、南の堀覆土を掘り込んで構築されているので、16世紀末以降と位置けたい。

第V章 ま と め

6週間余にわたって、第1次調査を実施し、駒ヶ根市及び長野県内で、出土の少ない中国青磁器の検出ができ、また、昭和59年度に予定される青木城遺跡の前段階的発掘調査ができた。

中世の遺跡を発掘調査することは、他の時代の遺跡の調査と若干異なり、出土遺物も又、遺構も少ない現況にある。また、出土遺物の時代・年代判定が難しい面、歴史的文献との係わりが希薄である面、中世の遺跡の体系的集大成がなされていない面等が、桎梏として現実的にある。

今回の調査で、十分に遺構・遺物の検証・分析ができたとは言い難いが、一資料として、研究される方々や近似の遺跡の調査をされる方々に一助となれば幸いと考えている。

最近、国県補助事業対象として、各地区で埋蔵文化財の発掘調査が実施され、「その成果」としての報告書の刊行が遅れ、全県・全国的な問題として表出してきた。報告書の刊行が遅れるという理由は、単に、発掘担当者の怠慢では決してないと筆者は考えている。発掘調査に至る経緯、発掘調査体制、開発事業の規模、同進捗情況、文化庁・県教委・各市町村の「文化財」保護体制等の複雑化した矛盾を要因として生まれてきたものである。又、発掘担当者自身の「歴史的文化的遺産」を護り、子々孫々にまで継承発展させるべき「歴史観」の不明瞭さにあると考えられる。筆者自身も、決して例外ではない。今こそ、様々な体系、「歴史観」等が、「歴史的文化遺産の保護・保存・継承発展」の命題のもとに、検証される状況であると痛感している。

末文で大変失礼と存じますが、発掘調査に御理解と御協力をいただいた作業員の皆様、地元の方々、陶磁器鑑定をして下さった瀬戸市歴史民俗資料館長、宮石宗弘氏、同学芸員、藤澤良祐氏に対して、心から感謝の意を申し上げます。誠にありがとうございました。（小原 晃一）

版 圖



1. 青木遺跡全景（南西より）

2. 第1次調査区全景





第一次調査区南区グリット・トレント設定状態



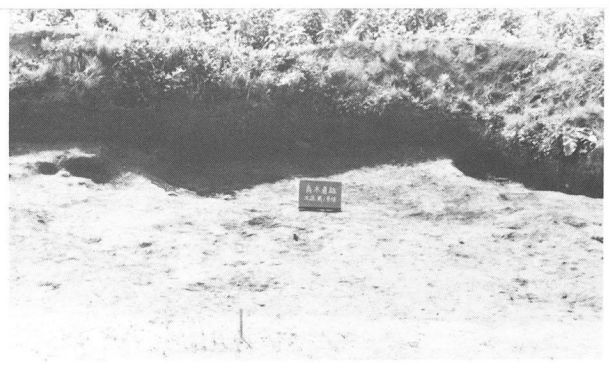
3. 第1次調査区近景（東より）

4. 第1次調査区南区調査風景

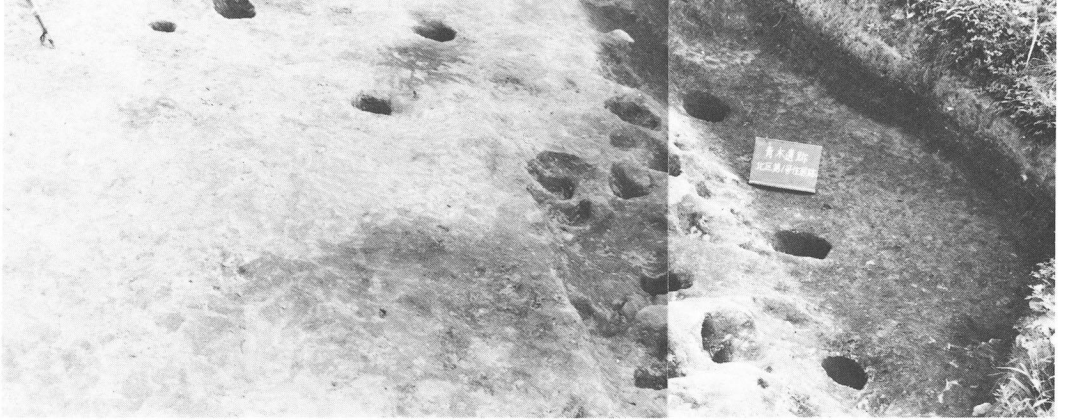




5. 北区28~30-あ~う遺物出土状態



6. 第1号住居跡検出状態



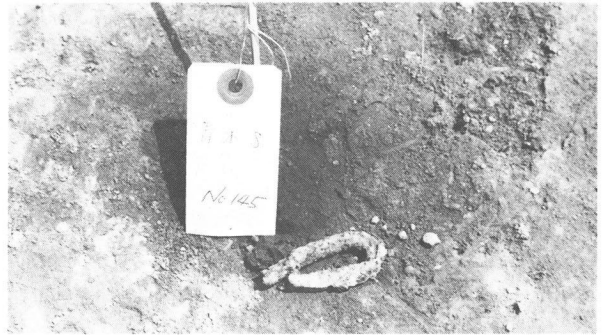
7. 第1号住居跡

8. 内耳 (No.143)

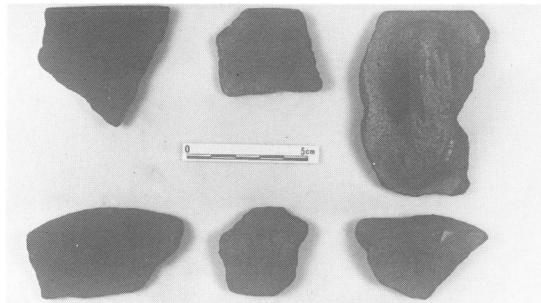
9. 鉄製品 (No.143)



10. 内耳 (左: No.165、右: No.164)

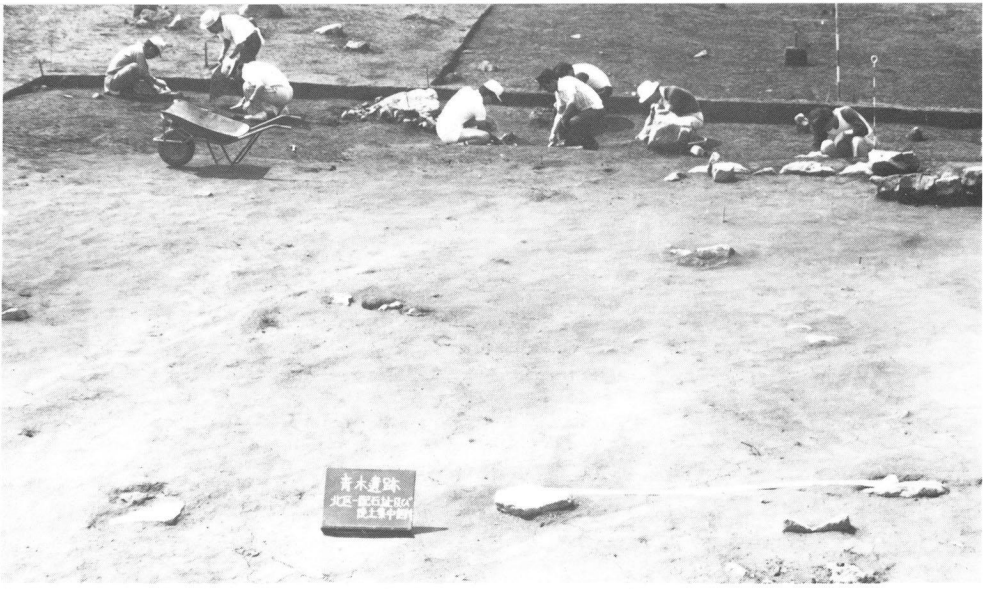


11. 火打石 (No.141)

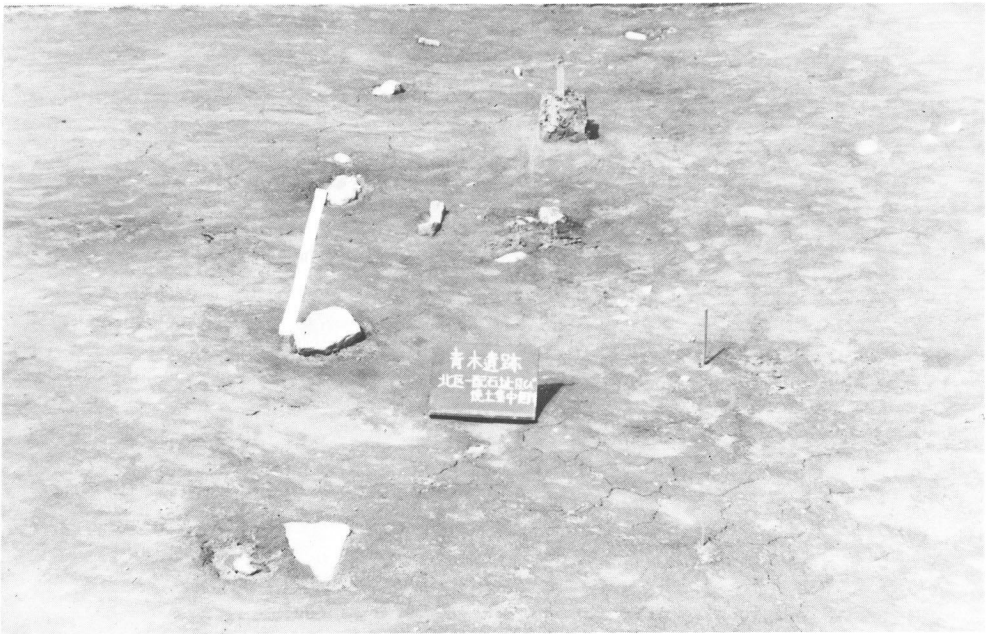


12. 第1号住居跡出土内耳土器

13・礎石及び焼土集中箇所



14・礎石



15. 青磁 (No.1)



16. 青磁 (No.29)

18. 常滑 (No.50)



17. 天目 (No.126)

